

奄美・N集落の都市移住者の個人生活史

——宗教との関わりについて

田島 忠篤

1 問題の所在

——個人史（ライフヒストリー）・生活史研究における問題点と本研究の特徴

日本における個人史・生活史研究⁽¹⁾は、心理学や社会学や文化人類学をはじめとしてさまざまな分野に应用されてきた。その資料収集も伝記、日記や手記など調査対象者が書いたものから、調査者がインタビューによって得たものまで種々様々である。宗教研究においても同様の動きが見られるが、とくに二〇〇二年のIA

HR（国際宗教史・宗教学会）東京大会では、日本の四〇代若手研究者によって宗教社会学における生活史研究を扱った部会が開かれ、その成果は二〇〇六年に『ライフヒストリーの宗教社会学』⁽²⁾として出版された。

この『ライフヒストリーの宗教社会学』では、上記の研究を宗教を中心に捉えなおし、方法論としての個人史・生活史を「ある個人が時間的経過を踏まえ、自らの経験や社会に関して解釈した記録」⁽³⁾と定義し、執筆者六名がその手法に関する共通理解を土台に各自が独自の研究を展開し、発表している。ここでは、一九八〇年

代初期の個人史もしくは口述の生活史による個人をとりまく社会事象の「記述」にとどまらず、社会学理論の仮説検証を試みたり、理論構築を目指したりして、社会科学的「説明」に用いられているのが特徴である。これらの先行研究の成果を踏まえながら、個人生活史研究における本稿の特徴について述べてみたい。

先の書では「ライフストーリー」の問題点として、社会学の数量的方法と比較して、その対象となった個人の母集団の「代表性」の問題と、その個人の話した内容に関する「信頼性」⁽⁴⁾、さらに研究目的に対する「妥当性」を挙げている。この研究者集団は、「特定の社会集団における語り手の位置を確定し、データ収集プロセスを透明化し、当事者の語りの集積から分析カテゴリーを帰納するライフストーリー・アプローチは、代表性・信頼性・妥当性の問題にも一定程度対応可能な方法」⁽⁵⁾と主張している。

しかし、筆者は被調査者の選出方法を記すことと代表性は別問題であり、依然として研究対象者を母集団の中に位置づけることが問題点として残ると考える。

本研究では、このような代表性に関する解決手段として対象者の選出方法に質問紙調査を用いることが有効な解決策であることを主張したい。ここに従来の生活史研究にはない特徴がある。そのためインタビュは任意に選ばれたのではなく、質問紙調査結果から得られたケース全員を対象としている。

以下の2章では具体的な研究方法について説明し、次の3章以下では調査対象者のインタビュ結果を基に再構築された個人生活史を記し、最後にまとめとして、個人史・生活史研究のあらたなる可能性について言及したい。

2 研究方法

本稿で扱われるインタビュによる「個人生活史」収集の目的は、都市移住後も母村との社会的紐帯が維持されている農村―都市移住者と宗教変容の関連を説明するためのものである。その目的のために、移住後も母村との社会的紐帯を維持している例として沖縄・奄美大島特有の同郷出身者集団である郷友会⁽⁷⁾があり、その会

員のなかでも都市移住一世を対象としている。そこで調査対象として、二〇〇二年時、世帯数七六、人口一五五の奄美大島にあるN集落を選んだ。その理由は、この集落は単独で「郷友会」を組織しており、二〇〇二年の会員名簿では、関西地方には二四一世帯六五二名がおり、この集落から阪神地方への都市移住者全体を対象として調査できる規模だからである。

具体的な方法としては、個人生活史調査の対象選出の第一段階として、阪神地方在住の一九八〇年の郷友会員七九四名を対象として家族内の地位を基にした層化サンプリングにより三一五ケースを抽出した。それらを対象として郵送留め置き法による質問紙調査を実施した。⁽⁸⁾その結果、二二三の有効回答を得、回収率は七〇・八%となった。質問紙は、移住世代や宗教所属についての項目もある。

これら宗教所属回答者の中から、宗教所属を表明しているのは四九ケース(二三・〇%)であった。その内訳は、創価学会二一、カトリック八、大本六、仏教六、神道三、立正佼成会二、生長の家一、出雲大社教一、

教団名無記名一であった。この中から、都市移住者一世を対象として絞ったうえで、まず複数のインタビューを得るために上位三教団に調査対象を絞った。さらに、年齢という変数を統制するために、第一回調査当時、六五歳から四二歳(一九一五から一九三八年生まれ)を対象とした。

インタビューは、同一対象に対して、昭和五五(一九八〇)年八月、昭和六三(一九八八)年八月、平成八(一九九六)年八月、平成一四(二〇〇二年)九月と二〇年にわたり、最大四回のインタビューを実施した。一回目、二回目、三回目は阪神地方で行ったが、二〇〇二年はフォローアップ調査として、阪神地方だけではなく、一回目で後母村に帰村した者も対象として実施した。

同じ対象に対して複数回インタビュー調査することに関しては、先述の『ライフヒストリーの社会学』でもデータの「信頼性」を増すためにも「継続的」に「複数回」実施することを薦めている。しかし、筆者にはそのほかに三つの理由がある。一つは、ほぼ八年毎に観察することにより、その変化が見られることである。二つ

目は、回を重ねる度にラ・ポールができ、より詳細に話を聞くことができるからである。さらに、三つ目には、フィールド調査やインタビュー調査結果や村落誌・郷友会誌や自治体資料と照合して不明な点、記憶違いなどと照らし合わせて明確にするためである。

インタビュー時には、個人の社会移動歴や信仰歴について聴いた。しかし、社会移動や信仰歴には当事者の家族や親族が関わっており、家族・親族関係を尋ねざるをえない。そのような膨大な移動や親族に関する情報を整理し、一方では母村のフィールド調査で聴き取りした親族関係や墓碑名簿、集落や小学校史、郷友会誌から町民便りに掲載された個人情報までと逐次照合しながら、個人生活史を再構成している。

この様な過程を経た本研究では、個人生活史の記述についても特徴がある。とくに、オーラル・ライフヒストリーや口述の個人史・生活史の醍醐味は、その内容も含めて「語り」にあることは否めない。しばしば「」で引用される語りには対象人物が語る「リアリティ」があり、それだけで読み手の想像力を掻きたてる力がある。

る。しかし、一方では、部分的な「」で剥ぎ取られた語りには、その過程でデイスコースを離れて、一人歩きをする危険性を孕んでいる。本編での生活史では、語られ方よりは語られた内容に対する事実の記述に主眼が置かれ、個人の生活史を再構築している。ここでは、このような観点に立つて個人を中心にして生き様をインタビューや私的・公的ドキュメントで時系列的に再構築した記録を個人生活史と呼んでいる⁽⁹⁾。

本研究では、都市移住と宗教変容、新宗教への加入との関連の説明が目的である。そのため、どのような経緯で移住し、そこでどのような生活をし、どのような経緯で宗教が変容していったのか説明することにある。したがって、語りの面白さよりは、何時、何処へ、誰と、誰を頼って、何を目的に移住し、その結果、どんな仕事をし、どこに誰と住み生活し、その過程で宗教がどう変わってきたのかを時系列的に問う必要がある。そのために、質問項目として尋ねるのではなく、「個人生活史」という方法で調査対象者に人生を語ってもらったものである。

本研究では移住が宗教加入にいかに関わっているかを解明しようとする。したがって、宗教に所属している郷友会員と所属していない郷友会員との間で何が異なっているかを明らかにする必要がある。そのため、宗教無所属を表明した移住一世の同年代会員も調査対象として個人生活史を尋ねている。調査対象全体は表一・二のようになっている。

本調査研究は、社会的な因果関係の説明に個人生活史を利用するための一つの試みである。今回の論考では、仮説検証よりは、そのもととなった個人生活史の記述に留める。その理由は、インタビューをもとに研究者によって再構成された個人生活史の記述を読者にあらためて問うためである。

対象となった二七名の個人生活史については、大本、創価学会、カトリック、無所属表明の順に、そして年齢の高い順から述べていきたい。しかし、夫婦で尋ねている場合には、夫婦一緒に個人生活史を記述するため年齢が前後していることをあらかじめ断っておきたい。また、集落名が特定されないために、この集落に

対する他の研究論文や集落誌・郷友会誌に関する書誌データも割愛している。

次の章では、個人生活史を記述していく。

3 大本信者の生活史

ケース1・2

昭和三年、ケース1は、明治二二（一八八八）年生まれの父（昭和一六年〓一九四一死亡）と明治一九（一八八六）年に近隣の集落で誕生した母の次男として誕生する。I家とN家は母村内でも有力者層で、父方の祖父はI家からH家の養子となる。同じ養子として、O家から入った父方イトコには当時の鎌倉郡長を務めたこともある人物を輩出している。母村を含めて奄美で最初に大本に入信した人物と祖父とは生物学上の父方イトコである。

ケース1が、昭和九（一九三四）年、母村尋常高等学校尋常科一年生の時、当時既に単身で大阪に働きに出ていた父に「呼び寄せ」られて、祖父母を母村に残して船で四日かけて父のもとに移住する。昭和一二年、尋常

小学校三年の時、母村に取り残された祖父母が淋しいと言うので、自分ひとりだけ、母村に帰され、祖父母と生活することになる。この時、祖父母はすでに大本信者だった。行政村の村長経験のある祖父から厳しい躾を受けると同時に、毎朝大本の祭壇の前で「おつとめ」をさせられて自分だけ育った。

昭和十四（一九三九）年、小学校五年の夏休みの時に、中学校に進学するため、「勉強が遅れるから」ということで、家族のいる大阪へ移動する。しかし、昭和十五（一九四〇）年、小学校六年の時、父の病気で転地療養のため、家族全員で母村に「引き揚げる」。その一年後の昭和十六（一九四一）年、小学校六年の時に父が母村で死亡する。そのまま母村に残り、昭和十七（一九四二）年、尋常高等科二年を卒業し、単身で大阪に渡り、夜学に通う。

しかし、昭和十八（一九四三）年、入隊し、二〇年に敗戦とともに復員する。母村に帰る途中に山口の叔母の所で半年過ごす。その時、行政権分離⁽¹⁰⁾（一九四六年）の話聞き、すぐに奄美に帰る。しばらく、田舎で畑仕事をして過ごす。苦しい生活だったけれど、母村の若者

皆で唄遊びをしたりして、過ごした。昭和二三―二四（一九四八―四九）年は、一度途絶えた鰹業が復活し、拿捕された密航船を父方祖父が買い、漁業組合を結成し、鰹漁業を営み、また鰹節を製造した。最初の一年は祖父が組合長を務めた。自分も餌部員として三年間務めた。しかし、自分は、稲作農業が忙しく、欠勤が続き、組合の規定により配当どころか、違約金を払う破目となり、会員権を譲渡して船を下りた。

昭和二六（一九五二）年、数え年二四歳で母村N家のケース2と結婚する。弟のケース3（昭和七年―一九三三年生まれ）が高等学校を卒業し、家業を手伝えるようになったのを機会に、また、自分の家族を養うために数え年二五歳の時に大阪に「密航」⁽¹¹⁾する。大阪に上って最初の二年間は辛かった。母村出身者の先輩の紹介で勤めたが、月三〇〇〇円の給料では仕送りも出来なかった。生まれてくる子どもにも何も買ってあげられず、辛かった。こんな時、仕事で来た町で大本の看板を見て懐かしく思い、思わず駆け込んでしまった。

その後、昭和二八（一九五三）年ごろ、叔父の紹介で、

取引先の広島県出身の社長が経営する〇〇電材会社（従業員数三四―五名）に就職する。まじめに働いていたため、社長に信用されていた。そして、昭和三四（一九五九）年に下関の叔母の依頼で、一二〇万円の家を大阪で探す。その時、二軒分を買い、一軒を八五万円に負けてもらって自分の家として買った。その時、N家出身で大阪で歯科医院を経営する叔父から二五万円を借りた。そのころ仕事も順調にいったが、他の社員が妬んで社長に讒言し、それから冷や飯を食わされるようになった。

昭和三九（一九六四）年四月に、大本の分苑長の勧めと、資金的援助を受けて、妻の弟のケース5（昭和八年―一九三三年生まれ）とともに資本金五〇万円で独立する。五〇万円の内、二〇万は自己資本で、後は、分苑長から無担保で一〇万円を年千円の利息で借りた。それまでの会社では、給料四万三千円だったのが、六―七万円にもなった。従業員は五―六名で、同じ地方の出身者が一人いた。仕事も順調で、昭和五二（一九七七）年港区に現在の土地と工場を手に入れた。

自分の一生を振り返って、周囲の人に恵まれて、助けられた。とくに、独立を促してくれ、独立の金を貸してくれた大本分苑長がいる。同郷者からは励まされ、同業者、下請けからも助けられた。時には、独立したての苦しい時に、保証人として高利貸しに四〇万円支払わなければならない時もあった。しかし、独立に際して下請け先からは、工場を借りてくれと頼まれ、保証金三〇万円で、月五万円の所を三万円に負けてもらった。また、義理の弟ケース5も分苑長の口利きで就職し、辞めて自分のところを手伝う時も分苑長の口利きで和やかに辞められた。また、自分の工場を購入して移転する時も、下請けの口利きで今の物件を見つけた。また、七〇〇万円の資金も、昔の勤め先の工場に出入りしていた当時の行員が、十三支店長になっており、三〇〇万円を借りられた。

郷友会活動もほとんど参加し、昭和三三―三五（一九五八―六〇）年度は、六人の幹事の一人として、三五―三八（一九六〇―六三）年度は幹事長を務めた。その後、四七―四八（一九七二―七三）年には副会長を務めた。郷

友会の節目の年である昭和五二（一九七七）年の五〇周年記念時には、副会長を務めていた。昭和五一（一九七六）年再度副会長を務めたが、途中から会長が入院をしたために実質会長を務めるようになった。その外に、昭和三七（一九六二）年六月に、阪神の郷友会歌を作詞したり、昭和五二年九月刊行の二八三ページにおよぶ阪神郷友会の記念誌「五〇年の歩み」の編集員を一年間務めたりした。その後、昭和五二年から五四（一九七九）年まで会長を務めた。後任がいなくて大変でもう一期という話もあったが、固辞した。その後は、会長経験者で構成される顧問の一員として、現在に至っている。

著者の調べたところ、寄付金も先頭を切って出しており、その額も常に会員の中で最も多い方の部類に入る。妻も昭和四五年から五〇年（一九七〇—七五）まで幹事を務めた。

バブル経済崩壊以後、仕事もさっぱり無くなり、困っていたが、昔の知り合いの同業者が、新幹線関係の電線の注文を持って来てくれた。自分が正直に働いてきたためだと思う。

昭和四五年には一九年ぶりに母村に帰った。その時に、神社が荒れていて、危機感を感じた。大本信者として、産土を大切にすることは当たり前であり、当時の郷友会会長や村長に、陰になり日向になり働きかけた。そのため、再建ができた。

昭和五六年前分苑長の息子が引越すため、分苑を預かり、分苑長となる。平成六（一九九四）年十二月、ブラジルのジャンジラ市の「大本南米本部」にて大本宣教七〇周年記念祭典が挙行され、その時日本から一〇〇人が参加したが、その一員として妻と参加した。

平成八（一九九六）年現在、娘も結婚して幸せな家庭を築いている。しかし、長男は父子家庭となり、同居して子どもの世話をしている。長男と家業を護っているが、長男と子どもたちが不憫でならない。

ケース2（ケース1の妻 出自と結婚するまで）

ケース2は昭和六（一九三一）年に長女として誕生する。両親は五人の子どもをすべて母村で産んだ。二人の間にはじめに生まれた子どもは長男で、昭和三（一九

二八)年に生まれた。彼は平成八(一九九六)年時点では高等学校教員を引退し、母村近隣の町に住んでいる。二番目はケース2であり、三番目は、昭和八(一九三三)年生まれの次男で、ケース5でもある。四番目は昭和一〇(一九三五)年生まれ、一九九六年時点では沖縄で自営業を営んでいた。五番目の子どもは次女で、ケース4であり、ケース3の妻でもある。すなわち、ケース1と3の兄弟とケース2と4の姉妹同士が結婚している。

ケース2の父と妻は父方のイトコ同士である、すなわち親同士が兄弟であり、ケース2の父方母方双方の祖父母は母村の同じ墓に埋葬されている。また、ケース2の父方母方双方の祖父は、この母村に大本を布教した人物と父方のイトコ同士でもある。また、ケース1と3の父方の祖父とこの大本を奄美に初めて紹介した人物とはイトコ同士でもある。このように、N家、I家とO家の家系は血縁的にも繋がっている。

ケース2は母村の国民小学校及びその高等科を一四歳の昭和二〇(一九四五)年に卒業した。卒業後は家事手伝いをしていた。ケース2の父は、卒業前の昭和一

八(一九四三)年に四七歳で亡くなっている。昭和二六(一九五二)年、二〇歳の時結婚したが、一年後には、夫ケース1で述べられているように、村に子どもとともに残された。昭和二九(一九五四)年、奄美諸島の日本復帰後、すぐに子どもを連れて大阪の夫のところに移住し、家族一緒に暮らすようになった。

ケース3(ケース1の弟)と4(ケース2の妹)

ケース1の弟として、昭和八(一九三三)年母村に生まれた。当人の記憶では、三十四歳まで父が近隣の町で鉄工所を経営していたので、家族全員で母村近くの町に住んでいた。その後、大阪に家族で移動し、塚本、十三、野田に住んでいた。野田に住んでいた時に小学校に通っていた。親は仕事が上手く行かない度に占い師に見てもらっていたので、家を転々としていた。昭和一六(一九四二)年、八才の時に第二次大戦の勃発で父、兄、姉と一緒に母村に引き揚げた。(兄ケース1は父の転地療養のため村に引き揚げたといっていた)

昭和一九(一九四四)年に母村国民小学校を卒業する。

昭和二二（一九四六年）、終戦の翌年に高等科を卒業する。

その後、村立実業高等学校（前青年学校）に入学したが、一年通ったら閉校となった。そこで、昭和二三（一九四八年）一五歳の時に近隣の町立の実業高等学校に編入学した。昭和二五（一九五〇）年に新制高等学校に昇格し、二六（一九五一年）三月にその高校を卒業した。その年に、琉球軍政府の教員募集試験に合格し、昭和二六年四月から近隣の集落の学校で助教諭として働いた。

昭和二八（一九五三年）の一〇月、当時大阪への渡航手続きが早くできるということで、沖縄に単身で移動した。和歌山出身の義理の叔父が〇〇建設の事務として東京から派遣されており、その人を頼っていった。約八ヶ月おり、その間タイプ学校にも通っていた。しかし、復帰の二ヶ月後、昭和二九（一九五四）年一月に二一歳の時、下関の父方叔母の所に行った。三月に今度は、母方の叔母を頼って大阪に移動した。三ヶ月遊んでいたが、同郷出身者で大阪府の消防のトップになった人の紹介で、ミシン会社の仕入れ検査課に入社した。しかし、昭和三二（一九五七年）年、他社の課長ともめて、あてもな

かったのに退職した。

その年に、母の兄にあたる叔父の紹介で「〇〇プラスチック」（近隣の集落出身の女社長）の工場長として就職した。プラスチックの鋳型の設計図を製作していた。約三年間いたが、昭和三五（一九六〇）年経営不振のおり、社長に談判に行き、くびになる。

一九六〇年、一般募集で、〇〇ゴム工業の社員採用試験に合格した。〇〇ゴム商事に配属された。翌昭和三八（一九六二年）年、同郷の幼馴染で、兄嫁の妹でもあるケース4と結婚した。翌年、長女が誕生する。六年間の内に係長までになったが、客を掴んだので独立を決意して、そこを辞めた。

昭和四一（一九六六年）年、三三歳の時、独立して東大阪の片町線沿線にスポーツ用品店を開業するが、一年半で倒産した。

昭和四二（一九六七年）年、東京へ一家で行く。一般募集で日通航空の下請け会社に就職した。偶然社長が奄美徳之島出身だった。センターで配達、仕分け、事務職となんでもした。妻であるケース4は、家計を助ける

ために家の近所で仕事を探し、一般募集で歯科助手をした。そこでは一三年間働いた。

昭和四四（一九六九）年、三六歳の頃、同じ集落出身者の紹介で横浜の給食物資の納入会社に車持ち込みで就職した。二年後の昭和四六（一九七二）年、株式会社ユニーの冷凍関係の專業仕入れ担当として働いた。三ヶ月で商売のこつを掴んだ。その後、調布深大寺のスーパ一のテナントに応募し、職人一人、パート二人を雇って魚屋を開業した。昭和四八（一九七三）年には次女が生まれた。

この間東京の同郷会にも参加し、「もあい（たのもし講）」などもしていた。

昭和五二（一九七七）年、四五歳の時に歯の病気から大病になり、死にそうになった。西武ストアー、主婦の友の店などが近くに出来て商売も落ち目だったので、八年開業したが、閉店した。兄のケース1も大阪に来るように言っているの、それを受け入れて大阪行きを決心した。中学三年の受験生がいたので家族だけ大阪に先に行かせた。

翌昭和五三（一九七八）年、大阪に移った。兄から一緒に鉄工所をするように勧められたが、食品関係の仕事がしたいので断わった。株式会社魚国総本社の食品部流通センターの部長と面識があったので、ここでも車持ち込みで働いた。三〇〇ヶ所に配送している。

平成八（一九九六）年八月の調査では元気であったが、その翌年交通事故で入院し、死亡したと郷友会報を通して知った。

ケース4は昭和二三（一九三八）年、母村に生まれる。兄弟姉妹は、ケース2と同じである。昭和二五（一九五〇）年、母村の小学校を卒業後、隣集落の中学に進学し、昭和二八（一九五三）年卒業する。奄美復帰後の昭和三〇（一九五五）年に義兄ケース1を頼って、大阪に単身で移住する。ケース2の紹介で大阪出身者の経営する歯科医院の医療助手として四年間働いた。昭和三六（一九九二）年に兄嫁の義理の弟でもあるケース3と結婚する。

ケース5（ケース2の弟と6

ケース2の弟で昭和八（一九三三）年に母村で誕生す

る。父は、昭和一七（一九四二）年、小学校二年の時、朝鮮にて四三歳で死亡したと記憶している。父方叔父が朝鮮の鉄道に勤めており、電気工事をしていたのを頼って単身で渡ったみたいだ。母も五年後、新制中学一年生であった昭和二三（一九四八）年に母村で死亡した。両親がこうして早く死んだので、生まれた時から祖母に養育されていた。

新制中学第一期生として、昭和二三（一九四八）年近隣の集落にある中学を卒業した。卒業後、同級生のほとんどが沖繩に出稼ぎに行っていたが、二〇歳頃まで母村で農業をする。両親もおらず、同居していた兄が教員をしており、家の農業（稲作）をする人がいなかったためだ。その頃、養育してくれた祖父は七〇歳と高齢であった。

沖繩に出るまでは、青年団活動に積極的に参加していた。団長もしたことがある。私が団長の時まで青年団は茶畑、蘇鉄畑など三つ所有していた。巳の日は奉仕作業をした。また、当時鶏の放し飼いが禁止されており、もし、放し飼いの鶏を見つけたら自由に捕まえ

てよい事になっていた。持ち主は、もし返して欲しければ五円の罰金を支払うことになっていた。茶畑や蘇鉄畑の収入は少ないので、結局後に青年団が土地を売ってしまったようだ。

一九歳の時に、沖繩に働きに出る。住田建設（ケース2も働いていた）で働く。弟も中学卒業後すぐに自分を頼って沖繩に来た。時期を同じくして、母村の家を新築するため人手が足りないから帰ることになり、自分の代わりに弟を住田建設で働かせた。結局、弟は、一年後散髪屋に住み込みで働くことになった。その後、沖繩の人と結婚し、個人営業の散髪屋を営んでいる。

昭和三一（一九五六）年は、養父の祖父が死亡したり、自分が結婚したりして忙しかった。祖父は七七歳で死亡し、そのまま集落の墓地に埋葬してある。母村でやはり母村生まれのケース6と結婚した。

昭和三二（一九五七）年一〇月、単身で大阪に出稼ぎに行った。実の姉ケース2は、そこを辞めていこうと言ったので、そこを辞めて義姉を頼って行った。義姉の夫が旋盤工として働いていた工場に勤めた。しかし、そ

こが半年後に倒産したので、義兄ケース1に頼んで、
〇〇工業に入社した。

昭和三三（一九五八）年、妻を大阪に呼び寄せて、義兄のケース1家族としばらく同居した。その後、ケース1の大本の支部（分苑）長のところで溶接工として働く。それと同時に、ケース1の家近くにアパートを借りて住む。昭和三五（一九六〇）年には長女が生まれた。

昭和三九（一九六四）年、義兄が独立するので、引き抜かれた。姉がケース1の妻だったので、しょうがなかった。また、この年には次女が生まれた。

昭和四一（一九六六）年、アパートに越してきた。当時新築で四〇万の経費がかかった。半分は自分で、一〇万は義兄のケース1から、残りは友人から借りた。

大本は、義兄や姉に言われて入った。

普段、同郷の人では、自分の家族も含めて三大家族で家族ぐるみの付き合いをしている。夫同士同年齢でもあり、沖縄でも一緒に働いていた仲だった。そのうちの一つの家族の奥さんと自分の奥さんは双子だ。

ケース5の長兄は母村尋常小学校高等科を卒業し、

昭和二二（一九四七）年から二六（五二）年まで母村小学校の教員を皮切りに、奄美各地の小学校で教員をしていた。教頭になり、その後、定年退職し、郷里の近隣の町に住んでいる。（ケース2と同じ内容）

昭和八（一九三三）年、ケース5の祖父が歳若くして死亡したため、自分の父は母方の祖父母に引き取られて育てられた。なぜならば、ケース5の父母は父方イトコ婚であり、父方の祖父と母方の祖父が兄弟だからだ。そのため、自分の父は、成人してからは母方の祖父母の母の食料の世話から田畑の世話まで全て面倒を見ていた。そのため、母方祖父母の位牌は、ケース5の長兄が拝んでおり、父方の祖父母および両親の位牌はケース5が祀っている。これら全てのお墓は別々に建っていたが、兄と自分とは兄弟なので新しい納骨堂を備えた墓をつくり、そこに合祀した。

4 創価学会信者の生活史⁽¹²⁾

ケース7と8

ケース7は、母村で大正四（一九一五）年にS家の三番

表1. 大本、創価学会信者のインタビュー調査対象略歴

ケース番号	生年	最終学歴	結婚	入信年	入信地	媒介者	理由	その他	88年職種
大本									
1	1928	高等小学	1951 (23)	1954/0	大阪/母村	非西	貧		事業主
2	1931	高女	1951 (20)	0	母村/大阪	西	家		家業
3	1933	高等学校	1955 (22)	0	母村/大阪	西	家		会社員
4	1938	中学校	1955 (17)	0	母村/大阪	西	家		パート
5	1933	中学校	1956 (23)	0	母村/大阪	西	家		No.1 工具
6	1931	中学校	1956 (25)	1958	大阪	No.1	結婚		パート
創価学会									
7	1915	高等小学	1943 (28)	1956	大阪	No.11	娘病	大本改宗	パート
8	1921	高等小学	1943 (22)	1956	大阪	No.11	〃		パート
9	1916	尋常小学	1934 (18)	1958	沖縄	非西	三男病		パート
10	1925	尋常小学	1934 (21)	1958	沖縄	非西	〃	ユタ	パート
11	1921	尋常小学	1945 (24)	1956	大阪	奄美	病	兄、姉、妹	パート
12	1929	高等小学	1961 (32)	1955	福岡	親・兄弟	圧力	妻の姉	会社員
13	1931	中学校	1959 (28)	1960	大阪	非奄美	長男の病	妻の親	事業主
14	1924	中学校	1963 (25)	1963	大阪	No.7.8	病	夫奄美	パート

※入信年欄の0は生まれた時すでに家族で信仰していたことを示す

目の子どもで次男として生まれる。S家は、I、O、N家と関係が深い一族である。一二人兄弟であったが、長女は一三歳の時に、長男は昭和二（一九二七）年、二三歳で死亡している。そのため、その時から実質長男となっている。昭和五五（一九八〇）年の一回目の調査当時、すぐ下の三男は沖縄に、四男は母村にいたが、五男はすでに昭和五二（一九七七）年に大阪で死亡しており、つづいて六男も翌年大阪で死亡していた。次男の自分と三男の間、三男と四男の間にも二人女がいたが成人する前に未婚で死んでしまった。長女は、すでに死んでおり、残っているのは、次女と三女だけだ。三女とは同居していた。

ケース7の父は、昭和二一五（一九二七—三〇）年まで母村の長を務めていた。この頃、大本がS家の大本信者（大本の例で出てきた人物）によって母村に布教され、その時に入信している。

ケース7は、昭和三（一九二八）年集落の尋常小学校尋常科を卒業後、高等科に進み、昭和五年（一九三〇）年卒業している。卒業後、昭和六（一九三一）年ごろ、京都綾

部の大本本部に修行に出された。そこでは新聞・機関紙・雑誌の印刷をしていた。また、精神修養、エスペ란
ト語、ラッパの練習などもやった。しかし、大本の生
活が嫌になり、昭和一〇（一九三五）年ごろ時計を質に入
れ二円をつくり、大阪へ逃げてきた。

天禄まで来て川で泳ぎ、土手の水屋で休んでいると、
水屋のおじさん、おばさんに事情を聞かれ、しばらく
厄介になった。仕事も世話してもらい、製缶所で働いた。
大本本部から母村に知らせが行き、搜索願が出されて
いた。ちょうど天満橋で母村近隣の町で商店を営む家
の兄にばったり会い、当時十三に住んで巡査をしてい
た大本信者のイトコ宅へ連れて行かれた。そこで一週
間ほど居候して、徴兵検査のために母村に帰った。当
時母村では青年団長も務めた。

昭和二三（一九三八）年に、故郷を捨てるつもりで、大
阪経由で満州の牡丹口へ同級生を頼って行った。最初
はホテルの支配人をした。次に、自動車修理工場で
旋盤工をした。この工場ではノモンハン事件（昭和一二
年＝一九三九年五月から九月）で傷んだシボレーやフォー

ドの自動車を修理した事もあった。満州の冬はとても
寒く辛かった。

昭和一七（一九四二年）の暮れに、父の還暦祝いのため
に着の身着のままで二〇〇円持って母村に帰った。母
村にいた弟が近隣の集落の海軍工場に勤めていたが、
病氣をして休むようになった。そこで、工場長に頼まれ、
代わりに働いた。

昭和一八（一九四三年）四月、母村でケース8（大正二〇
年＝一九二二年母村生まれ）と結婚した。翌年（一九四四）大
阪に行きたくなったので、ひとりで飛び出した。その
時妻は妊娠五ヶ月であった。その後、昭和二九（一九五四）
年に再会するまで妻子とは会わなかった。

尼崎で母村出身者が工場を経営していたので、そこ
で工員として働いた。その工場は、母村出身者や近
隣の集落出身者が一〇名ほど働く、小さな工場だった。
しかし、戦争のため工場は閉鎖され、職を失った。

戦後も職はなく、兵庫県の甲子園横の武庫川で泳い
でいたら、沈んでいた木造船を見つけた。それを見て、
この廃材を薪に使って製塩することを思いついた。子

どもの頃、母村で塩を炊くのを見ていたので自分でもできると思った。母村の友人が大阪付近で鉄板を持っていたので、塩を炊く大きな鍋を依頼してつくり、親戚や母村の友人四人と製塩を始めた。戦争のため物資は不足しており、枳すれすれ一杯の塩と枳なみなみいっぱいの米四杯と交換した。多額の金を稼いだが、みな使ってしまった。

昭和二十四年から三〇年（一九四九から五五年）まで、釘工場で働いた。この間に、ケース11夫妻のところに世話になった。とても良くしてもらい、感謝している。友人のケース11は、母村のケース8と連絡を取り、一生懸命働いているからと尼崎に来て一緒に住むように手配してくれた。そのおかげで、一緒に生活するようになった。

一緒に生活する前のケース8は、昭和一九（一九四四）年三月に長男を出産した。義理の一番下の弟が昭和二二（一九四七）年、結婚を機に一緒に住むまで、夫の両親と同居していた。その後、ケース8は母村内に住む自分の親のところで生活した。しかし、当時すでに両親

は七〇歳以上であり、そうこうしているうちに亡くなった。昭和二八（一九五三）年六月二十九日午前一〇時郷友会誌による）母村で大火事があり、家や家財道具など財産をすべて失う。一緒に尼崎に住むまでは大変な生活をしていた。

昭和二〇（一九四五）年の終戦前に、尼崎に行く決心をして長男を連れて、近隣の町まで出たところ、防空警報のサイレンを聞き、母村に帰った。翌日、また町まで行こうと近隣の集落で、船を待っていると、昨日の空襲で町が灰燼に帰したことを知り、また母村へ戻った。その後、アメリカ軍が沖繩・奄美地方の行政権を握り、本州には渡航できなくなってしまった。

昭和二九（一九五四）年、とうとうケース8は尼崎に長男とともに着き、夫と再会した。その時、長男はすでに一歳になっていた。ケース11の多大な努力のおかげで、尼崎市内のアパートに親子三人で落ち着いた。その地区は、母村だけではなく奄美出身者が多く住んでいる地区であった。昭和三〇（一九五五）年、長女が誕生した。その夏から、ケース8は日本ビディという電

線会社に勤めた。そこには、同郷者が勤めていた。ケース8は働く間、一日一〇〇円支払って同郷出身者に子どもの世話を頼んでいた。しかし、昭和三九（一九六四）年、ケース8は失職し、一〇ヶ月間失業保険をもらい生活していた。今度は、保険のセールスウーマンとなった。

一方ケース7は、ケース11のほかに創価学会信者である同郷者の支援を受けて、日本シャフトに就職することができた。ここは、金属を加工してシャフトを作る工場で、同郷者も何人か勤めていた。しかし、すぐに人員整理にあい、職を失った。その後、やはり同郷者が何人か勤めていた日本冶金に勤めたが、そこは昭和五二（一九七七）年に会社がつぶれ、また職を失った。

職を失った時、お墓を整備して建てるために母村にしばらく一人だけ帰った。すぐに尼崎に戻ってから、〇〇金属〇〇に勤めたが、化学物質に侵され、昭和五三（一九七八）年に辞めた。こんどは、読売新聞の子会社の大和製紙に勤めた。

ケース8の家族背景と結婚するまで

ケース8は、大正一〇（一九二二）年、母村で三女として誕生する。ケース8には兄二人と姉と妹がいた。長女は、京都出身の人と結婚したが亡くなってしまった。この息子は今も母村に住んでいる。ケース8の妹は未婚で亡くなった。兄の一人は沖繩に家族と住んでおり、もう一人は尼崎に家族と住んでいる。

ケース8は、母村の尋常小学校を卒業すると、その高等科に進み、昭和一〇（一九三五）年に卒業した。卒業後すぐに尼崎に働きに来ており、ずっと住み続けている。同郷会では、昭和四一―四二（一九六六―六七）年、また昭和四三―四四（一九六八―六九）年幹事として貢献した。さらに、昭和四七―五〇（一九七二―七五）年までの二期四年間婦人部長を務めた。

宗教について

ケース7は大本の敬虔な信者宅に生まれ育ったが、昭和一〇（一九三五）年綾部の大本本部を去ったのち、全く関心がなかった。しかし、昭和三一（一九五六）年、長

女が一歳の時、病弱であつたために、世話になつていたケース11から「折伏」を受けた。それまで、ただ祖先の位牌に向かつて拝むだけであつたが、ケース11に、本当に信じるのであれば、すべての位牌を焼くように言われ、焼いた。創価学会の教義には精通することはないが、ケース11の教えることには従っている。昭和六三（一九八八）年、「私は熱心な信者ではない」と調査の時に筆者に話していた。ケース7は尼崎のあるブロックに所属していた。ケース7は、月曜日と金曜日に支部のミーティングがあり、月に一度座談会と支部会があるのを知っていたが出ていないといった。

平成八（一九九六）年、再調査を依頼したところ、病に臥せているため、無理であることを親族から聞かされた。

ケース9・10

夫ケース9は大正五（一九一六）年、母村に生まれる。夫は元々N家一族の血筋である。父は実の母とは離婚した。現在生きているケース9の兄弟は、沖縄にいる

二人の姉妹（昭和三〇一九二八年生まれで母村出身の妻、もう一人不詳）がいる。結婚と同時にO家の養子となる。

ケース9は、昭和二一三（一九二七―二八）年、母村の尋常小学校卒業後頃、N姓からO姓に改姓し、養子に入った（二回目の聞き取りでは、結婚後といていた）。小学校卒業後も母村にいたが、昭和七（一九三二）年頃、一七―一八歳までの間、七ヶ月ほど大阪守口の松下電氣に勤めた。昭和九（一九三四）年、一八歳の時、一時母村に戻ったが、父方叔父から呼ばれて、再び満州へ行つた。しばらく満州工業の事務をしていた。この時に、妻と結婚した。その後、大連に夫婦で移動した。そこで終戦を迎えた。

終戦一―二年後ようやく母村に戻れた。結婚後なかなか子どもが出来なくて、妻は、母村の「占い師」⁽¹³⁾の所で子どもが出来るように毎日御腹を擦ってもらっていた。

昭和二四（一九四九）年に長男を出産したあと夫婦で沖縄に移動した。沖縄では、長女が昭和二八（一九五三）年に、次男が昭和三二（一九五七）年に、三男が昭和三三（一九五八）年に次々生まれた。沖縄では警備の仕事に就い

ていた。その後母村に引き揚げた。

何年か不明だが、ケース9は単身で大阪に出稼ぎに出た。続いて、昭和三九（一九六四）年には長男が中学校卒業後、単身で大阪に就職のために移住した。長男は昭和五五（一九八〇）年当時、溶接工をしている。昭和四〇（一九六五）年、長女も中学校卒業後、大阪に移住し、守口の松下産業に就職した。

昭和四五（一九七〇）年、三男が小学校六年生の時に、一家で尼崎に引っ越した。その後、ケース9は六年間の内三年間は看病や三回忌などで、母村と尼崎を往復していた。

創価学会に入信した動機は、三男の病氣にある。沖縄時代に、後ろの家の人が拜んでいた、御本尊様を馬鹿にしたら、一週間後に三男が熱を出して、肢体不自由児となってしまった。毎晩拜んでいると、歩けるようになり、回復してきた。現在でも、朝晩拜んでいる。一―二ヶ月に一度座談会に出る程度だ。

妻方の祖父母、両親たちのお盆はしている。お膳を上げ、線香を絶やさないようにしている。一九七四年

に墓を母村に建てた。

昭和六三（一九八八）年に日蓮正宗大妙寺の檀家となり、支部は〇〇支部であり、大石寺登山も欠かさない（創価学会と日蓮正宗大石寺が分裂する前）。

子どもたちも積極的に会合に参加するようになった。長男の嫁も創価学会員で活発に活動している。長女（夫は母村近隣の離島出身者）も最近活動している。三男も会合にちよくちよく出かけている。

ケース10の家族背景

妻ケース10は、〇家一族の父（昭和二八年―一九五三年死亡）と母（昭和四四年―一九六九年死亡）の三人姉妹の長女である。父は五〇斤樽を造る名人で、馬を使える位の裕福な家庭だった。近隣の離島の人とよく、樽を米や魚と交換していた。弟がいたが生後四〇日で死亡した。次女は、夫が死んだ後も夫の親戚の世話しながら母村に住んでいる。三女も長年母村にいたが、子どもが母村で死んでからは名瀬に住んでいる。

母方の祖母は近隣の離島出身で、「ユタガミ」（口寄せ

や占いをするシャーマン)をしていた。四月、里の川のアムイワクという地名のところで拜んでいた記憶がある。祖母は耳のしたにガブ(瘤)があったが、死ぬ前に消えた。きつと、カミダヨリ(交霊)出来なくて相性のある人の所に飛んで行ったに違いない。現在この神事は、母村で次女が継いでいる。三女は、創価学会員だが、姉の水神も拜んでいた。

創価学会の教えの話になると、「この『カミサマ』は、拝むと、とてもすごい力がある」と御本尊の奉つてある仏壇を見て幾度となく同じ言動を繰り返していた。

ケース11

大正一〇(一九二二)年、母村で誕生する。幼くして両親を無くし、叔父の家から小学校に通った。母は後妻で近隣の集落出身者である。母村の尋常小学校では、郷友会の顧問で、阪神の奄美会の有力者でもある人の最初の教え子だった。昭和九(一九三四)年に高等科を卒業した。

昭和一一(一九三六)年、一五歳の時に、姉が既に尼崎

にいて、最初はその姉が米屋の奉公先を見つけてくれた。米屋で三ヶ月働いた後に、やはり姉が下駄屋を紹介してくれて転職した。その下駄屋で一年間働いた後、淀川銅管で二、三年働いた。

昭和一六(一九四二)年に、徴兵検査を受け、その一ヶ月後熊本で入隊する。

昭和一八(一九四三年)、西ノ宮警察署巡查を拝命した。終戦後の昭和二四(一九四九)年で退職し、魚屋を経営する。昭和二六(一九五二)年に魚屋を辞めて、淀川銅管が組織替えした大阪冶金工業(他のケースも勤めている)の保安課に就職したが、昭和四〇(一九六五)年に倒産してしまった。

大阪長瀬産業に転じて、五カ年在職した。昭和四五(一九七〇)年に日本シャフトに変わったが、そこも昭和五〇(一九七五)年に倒産し、その後は富士警備のガードマンを務めた。

妻は、大正一一(一九二二)年生まれで西ノ宮出身である。昭和二〇年八月終戦の頃、警察官時代に恋愛結婚する。当時本当に終戦後の物資の無い時代だった。妻

は一度も母村に行った事がない。奄美の人同士が話をしているのを聴いても何を言っているのか、さっぱり解らない。目の前で悪口を言われても解らないので嫌だと思っている。

家族は、長女、夫は岡山県出身で二人の子どもがおり、西難波に住んでいる。長男は、妻は尼崎生まれだが、その母は沖繩出身で、父は熊本県出身者だ。高校教員をしており、子どもが一人おり、難波に在住している。次男の妻は尼崎生まれで、子どもが二人おり、市役所に勤めている。やはり尼崎三反田に住んでいる。三男は、市役所に勤めており、現在（昭和五五年＝一九八〇調査当時）独身で同居している。

創価学会の入信動機

創価学会には昭和三一（一九五〇）年、三五歳の時に入信した。当時は夜勤などが多く、激しく身体を壊して三回入院した。東難波在住で喜界島出身者に折伏を受けた。二人の姉、一人の夫は近隣の集落出身で、もう一人の姉は、夫がしている創価学会に入信した。兄も

入信した。近隣の集落出身者と結婚した姉の一人は、この喜界島出身者から折伏を受けて先に入信しており、もう一人の姉からも入信を勧められた。信心して身体が良くなるのなら、と思い、入信した。折伏した人は奄美の人ということは知っていたが、特別懇意な人ではなかった。あまり信心しなかった。去年四月（昭和五五年＝一九八〇年調査）頃からブロックの集まりにも熱心になるようになった。子どもは無関心だけど、家で朝夕の勤行、回向はきちんとしている。

正直言えば母村で生活したいが、妻が西ノ宮出身で反対するので帰れない。墓も兵庫県の稲川霊園に昭和三五（一九六〇）年頃設け、ここに両親の遺骨を母村から移した。この霊園は買うまで知らなかったが奄美の人の墓が多いようだ。両親の位牌は長兄が祀っていたが、亡くなり、その養子が継いだ。養子なので、本来ならば自分が祀るべきだと思っている。

ケース12

昭和四二（一九二九）年、母村生まれ。昭和一八（一九四三）

年、母村の国民学校高等小学校卒業の前に、満蒙開拓義勇軍に入る。茨城の訓練所に入った。その中隊で幹部候補が二名選ばれ、その中の一人であった。昭和

一九（一九四四）年に、下関、ブサン、ハルビンと列車で移動し、一週間かけて黒龍江近くの義勇軍と国境警備隊に配属された。昭和二〇（一九四五）年一六歳の時そこで終戦を迎えた。その頃はあばら家に寝泊りしていた。一〇月でもとても寒く、干草を被って寝た。あばら屋根の間から月を見て涙がこぼれた。死んでたまるか、こんな所で、日本に帰り、シマ（故郷）に帰るまでは、と心に誓った。

真冬に野犬が死体を食べていたが、誰も何も出来なかった。病気の仲間を助けるために、食堂で働いて残り物をバケツにとっておいて一〇―二〇人いた中隊に持って帰った。それでも六人が死んだ。遺骨だけは持って帰ろうと火葬した。ソ連兵が女の人を暴行していた。

昭和二一（一九四六）年八月、母村に復員した。前年の一〇月には父方イトコのケース25も帰っていて、母村

にある山の疎開小屋で生活していた。自分が帰ってすぐ母村で豊年祭をした。布団カバーをタオルがわりにして着のみのままであった。

嘉手納基地の消防隊に、郷里の先輩の紹介でも入れないので、翌二二（一九四七）年、通訳をしていたイトコでケース25の長兄に頼んで入れてもらった。昭和二三（一九四八）年、弟のケース13が沖繩に来たが、自動車にはねられ、足に重傷を負った。兄と相談して、土木作業は無理なので内地にもどした。昭和二五（一九五〇）年頃、沖繩で結核に罹って入院した。

昭和三〇（一九五五）年、奄美が日本に復帰して二年後、福岡の病院に転院させられた。その頃、長崎に兄や両親がいたので会いに行った。その時、兄や両親は既に創価学会に入信しており、バリバリ活動していた。昭和三四（一九五九）年、三〇歳の時に家族から折伏を受け、仕方なく入信した。大阪に行ってから今日まで活動はしていない。

福岡の病院から生駒山の病院に転送になり、昭和三六（一九六一）年に社会復帰するまで病院にいた。そこで

妻と知り合った。昭和三八（一九六三）年から同居をはじめ、昭和四〇（一九六五）年には籍を入れた。妻は姉の所に居候していたが、すでに姉が創価学会を信仰していた。妻は結婚したく、できるようにと思って信心を始めた。その時は、夫が既に創価学会に入会していると知らなかった。結婚前に妻は、自分の信仰のことを打ち明けたら、良い宗教だといってくれた、と喜んでゐた。現在集会には自分が出ないが、妻を車で送っている。

社会復帰後、ミシンのセールスを少ししていたが、日本石油に勤め、平成元（一九八九）年の定年まで働いた。定年後は、車で配達するアルバイトをしている。妻も平成二（一九九〇）年から働き始めたが、平成六（一九九四）年にも膜下出血で倒れた。意識があつたが身体が動かなくなり、ICUに入れられた。病院で手術をしようとしたが、反対して一晩待った。三日たつても大丈夫なので手術はしなかった。結局三週間入院した。

この時、地区の学会員がお題目をあげてくれ、妻も自分自身でも唱えていた。妻はいまでも毎朝花と水⁽¹⁴⁾を換

えてお題目は欠かさない。両親の位牌は無く、過去帖があるだけ。

それまで、婦人部地区幹事をしていたが、辞退した。〇〇黄金県〇〇本部〇〇支部〇〇地区で団地の半分がブロックとなっている。

昭和四〇（一九六五）年、この団地に来てから二三年経つ。両親は、はじめ横浜の兄の所で同居していた。昭和五一（一九七六）年からこちらにきて、同郷の人たちが毎週末訪ねて来てくれるし、娘二人が大阪にいて良く世話をするため、両親が大阪に残りたいと言ひ出した。親族会議を開き預かることにした。結婚して一〇年間、子どもも出来なかつたし、貧しいけれど良いと思つた。

郷友会関係では、「密航組」の下で働いた。中卒だが沖繩から来た人は一番力があつた。東京オリンピックの頃からオイルショックまで、家は不自由でもどこかに仕事はあつた。昭和四〇年（一九六五）代から五〇年（一九七五）代にかけて、家族の呼び寄せで会員数が増加したが、平成になってからは減少した。自分は、昭和五二（一九七七）年に会長を務めた。

ケース13（ケース12の実の弟）

子どもの頃は、二人の兄は、頭が良く、親に比較され、怒られた。しかし、小学校になると、兄たちは、田舎を離れ都会に出ていったので、怒られなくなった。親は教育熱心だったけれど、嫌いだった。昭和二二（一九四六）年に母村の国民学校高等科第二学年を修了し、修了後一年間、近隣の集落の実業学校本科に入学したが、教育制度が変わり、一年で廃校になった。そして別の近隣の集落の新制中学校に入学し、第一回卒業生となったが、二歳年下の学年と同級生になった。

卒業後一年間、鰯業の餌取りの仕事をしたが、昭和二四（一九四九）年、数え年一八歳の時、母村は食糧難だったので、兄のケース12に呼び寄せられて沖縄に出稼ぎに行った。沖縄では、基地建設をしていたが、事故で足を悪くした。その後、住田建設（この集落出身者が多く働いている）の労務課で事務をしていた。沖縄に行つて、初めて学問の重要性に気がつき、夜間に英文タイプと英会話を習った。

ゆくゆくは母村に帰ろうと思っていたが、返還前の

昭和二八（一九五三）年、数え二二歳の時にパスポートを持って、四国徳島にいる姉を頼っていった。その後、すぐに横浜にいる兄を頼って単身で移動した。足が悪いので座って出来る仕事を探していた所、兄の紹介で縫製工場に住み込みで働いた。周りは皆中学を卒業したばかりの中に混じつて、見習いとして働いた。そこでは、月二回の日曜日に五〇〇円の小遣いをもらい、休めるだけの生活だった。しかし、一年でレインコートや学生服のミシン掛けが出来るようになった。早く独立したいと思った。

その時、四国にいる姉が兄弟同様にして付き合っていた人の親戚の祖母が大阪で一人暮らししており、跡取りも無く生活していた。そこに住みながら二人のおばあちゃんの世話をした。祖先を護るために自分から進んで、姓を変えて養子になった。当時は借家住まいで、はじめは三〇〇万円位あると言っていたのに、無一文で駄菓子屋をしていた。

自分は、一般募集で見つけた縫製の仕事に就き、その家から六年間通った。初めは見習だったが、修行

して二―三年後には「受け取り」（出来高制）になった。当時、サラリーマンの平均収入が月収一八三〇〇円だったのに、手取りで三―四万の収入があった。

昭和三四（一九五九）年、数え二七歳の時に妻と知り合って結婚した。自分で貯めたお金で南紀白浜へ新婚旅行に出かけた。結婚後、大阪市の下町に三畳一間を借りて、従業員一人を雇って独立した。翌年長男が誕生したが、生後すぐに長男は重病にかかり、死にそうになった。妻の家の人から日蓮正宗創価学会への入信を勧められ、一心にお題目を唱えたら奇跡的に長男は助かった。また、昭和三六（一九六二）年には長女が誕生した。昭和四〇（一九六五）年には二男、四二（一九六七）年には次女が生まれた。この間人の三倍は働いた。

独立して一〇年目、昭和四四（一九六九）年に、同じ町内の借家を改築して、二階を作業場にして働いた。その後、隣の家が売りに出たので買って増築した。昭和五二（一九七七）年に今里一丁目に家及び仕事場を購入した。子どもだけは、大学に行かせたいと、塾に通わせるためにも一生懸命働いた。長男は京都薬科大学に一

浪で入学し、そこを昭和五八（一九八三年）に卒業して救命救急センターに勤めている。平成一〇（一九九八）年長男の長女が創価小学校に入学した。次男は、国立京都工芸繊維大学を卒業して、平成二（一九九〇）年東京の野村不動産に就職した。一級建築士、設計士の免許を持っている。五―六年東京にいたが、大阪に転勤となり、そこで結婚した。長女は美大へ行きたいと言っていたが、昭和五六（一九八二）年大阪成蹊短大を卒業して商社へ就職し、そこで恋愛結婚をした。次女は、昭和六二（一九八七）年帝塚山大学短期大学部を出て、大阪医科大学に一〇年勤めている。

しかし、平成元（一九八九）年、六七歳の時に糖尿病で入院した。ここまで、がんばって子育ても終わり、社会的責任を果たした。思いきって仕事を辞め、大阪市内の家を売って、その資金をもとに南紀で民宿を始めた。ちょうど、バブル崩壊前だったので、家は高値の二億ですぐ売れた。昔からの夢だった母村に帰って漁業をしたかったが、子どもも皆大阪にいたので和歌山に土地を買い、家を建てた。六人乗りの船、車も買い、

民宿を始めた。客を泊めるのは大変なので知り合いしか泊めない。遊び半分なので餌も船代も普通の半分くらいでしている。

郷友会関係の仕事としては、昭和四三―四四（一九六八―六九）年には副幹事長、昭和四九―五〇（一九七四―七五）年には幹事、昭和五一―五二（一九七六―七七）年には幹事長を務めた。できるかぎり参加していた。

従業員のほとんどは、創価学会の信者である。沖縄の甥も住み込みで働いている。私は、昭和三五（一九六〇）年二八歳で入信し、昭和五五（一九八〇）年、大ブロック長を務め、四六世帯のお世話をしている。年一、二回は大石寺登山をし、折伏にも努めている。昭和五一（一九七六）年から一年間、幹事長をしていた時、丁度「ブロック長」になり、大変だった。幹事長終了と同時に昭和五二年「大B長」になり、その時、郷友会の副会長にと言われたが辞退した。

創価学会に入信した経緯は、妻は妊娠九ヶ月で前置胎盤と診断された。妻の親は熱心な学会信者で、それを聞いてすぐ大石寺に登山してお題目をあげてくれた。

手術の予定だったのが、その親が帰ったら、未熟児だったが自然に生まれてきた。養子に入ったおばあさんは、学会には入らなかったが、信心深く石切り山の御札を必死に拝んでくれた。

保育器の中で順調に育って一〇日後に退院して家に戻ったら、顔が真っ青になって慌てていつもの医者に行った。すぐ入院したが、九日後に病状が悪化し、医者から見放された。明日の朝までもたないと言われた。妻の両親が来て、あんたが信心しないからだ、と言われたが、納得しなかった。医者が見放した者が宗教で助かるはずがない、と思ったからだ。しかし、信心すれば助かる、と言われ、折伏を受けた。

妻の父は、沖縄出身で、昭和三二（一九五六）年、戸田会長時代に入信し、「大正区の強信」とまでいわれた人だ。両親が入信したばかりで、妻はその頃創価学会活動にはそんなに積極的ではなかった。

養子に入ったおばあさんは、沢山の御札を持っており、「誹謗払い」をしなければ、と言われ、妻の両親が信じる日蓮正宗のお数珠対おばあちゃんの石切り山の

御札の争いとなった。神にすがる一念で決意し、裏の

空き地で御札を焼き、東の空を向いてみんなでお題目をあげた。病院に帰ったら、手足が細く御腹だけが膨らんでいたのが、ぺっちゃんこになった。お寺ですぐに御札（お曼荼羅）を受けて、夜一二時から一時まで勤行をした。子どもの健康は回復し、東成区の一〇ヶ月検診で健康優良児にまで選ばれて府までいった。その後は病氣知らずで育った。長男は御本尊に助けられた、と論じて育った。高校大学とも青年部で活躍し、とうとうおばあちゃんを折伏した。平成一〇（一九九八）年三八歳で男子部の本部長を務めている。次男は多少信仰が煩わしく思ったかもしれない。東京で寮に入った時、聖教新聞が取れなかったといっていた。

ブロック制導入の前は、電車で一時間かけて通っていた。昭和四二（一九六七）年に班長、昭和四八（一九七三年）に副大ブロック長（ブロック長兼任）で、昭和五三（一九七八）年に大ブロック長に就任した。昭和五三（一九七八）年からは地区部長となった。三四世帯折伏した。その中には、四国の姉、母村の同級生が含まれている。母

村では、二人の信者がいることを知っている。

母村は、文化的に遅れている。父方祖母は、ノロ（集落の女性祭祀者）をしていた。「里ノロ」、「金久ノロ」と二人がいた。白い着物を着て海から神を迎えているだけ。小学校低学年の頃、父親が高熱を出して、「占い師」（先述したものと同一）を呼びに行ったことがあったが、拝むだけであつた。

妻は、大阪生まれの大阪育ち、沖縄二世である。親は資産家で五階建てのビルを持っている。妻の外に四人の兄弟がおり、その四人とも草創期の頃からがんばった創価学会一家である。その内の一人は市議会議員である。三五歳で当選してから平成九（一九九七）年まで五期連続二〇年間、公明党の市議会議員を務めた。その市議の妻は台湾で生まれた。

妻は、戦後石川県に引き揚げたが、両親は離婚し、息子二人は父方に、娘二人は母方に引き取られた。自分は孤児院で育った。中卒後、石川の聖霊病院で二年間働きながら看護婦となった。カトリックの公共要理も勉強し、洗礼を受ける一歩手前まで行つたが、しかし、

教えに疑問を感じていた。信者も冷たいし、貧富の差や、病氣、なぜ死んで天国に行くのかも解らなかった。一八歳で、そこを辞め横浜の叔母の所へ行った。その後、大阪に移ってそこで勤めていた女医が、妻の理想の家族生活をしていた。その女医は創価学会の信者で、折伏を受けた。夫とは、その後学会で知り合った。

ケース14

N家一族の家の三女として昭和一〇（一九三五年）に中国大連で生まれる。父は、ケース9の実の叔父であり、大連で一緒であった。

ケース14の父は、明治三五（一九〇二年）に母村で生まれる。尋常高等学校卒業後に母村で大工をする。昭和二三（一九二八年）年、二四歳の時に母村生まれの同じ年の娘と結婚する。二五歳、佐世保で海軍に入隊し、半年、機関学校に通う。その後、昭和八（一九三三年）に転勤で中国大連に移住する。昭和一八（一九四三年）に召集を受け、昭和二〇（一九四五年）年、海軍兵曹長としてニューギニアで戦死する。終戦とともに中国から母村に引き揚

げ、母は軍人恩給をもらいながら子どもを育て、死ぬまで母村で生活する。

母は、子どもを背負いながら母村尋常小学校六年を卒業し、その後すぐに大阪に働きに出る。ミシン掛けやアイロン掛けを習った。長男は、昭和四（一九二九年）佐世保で生まれ、長女は昭和八（一九三三年）にそこで生まれたが、直後に大連に移動し、そこで次男が生まれたが、一〇歳で死亡した。昭和六（一九三二年）、次女が大連で誕生し、続いてケース14が昭和一一（一九三六年）に、四女が昭和一九（一九四四年）年に誕生した。

母村へは、母と長男、長女、次女、次男、三女で帰村した。長男は大連で小学校を卒業していたので、帰村後、すぐに沖繩に出稼ぎに出かけた。そこで、電気屋に就職し、昭和三五（一九六〇年）年まで沖繩にいたが、母村近隣の町に帰ってきた。

長女も昭和二八（一九五三年）、二〇歳の時に沖繩に行き、そこで結婚をした。そこでケース14の姉は長男を昭和二八（一九五三年）に、昭和三一（一九五七年）に長女を産んだ。ケース14の姉が三〇歳の頃、昭和三八（一九

六三）年、姉の夫は死亡した。そこで、子どもを母村の母に預け大阪に行く。その後、三〇代前半に兄のいる近隣の町に戻ってきた。その後、奄美大島の名瀬に一人で生活している。

三女は、母村小学校卒業、中学校卒業後、郷友会の有力者（ケース27にも登場）のお宅でお手伝いさんをしていた。七年後、一二歳で母村出身者と結婚し、各地を転勤した後、昭和五五（一九八〇）年に横浜に落ち着いた。

昭和一〇（一九三五）年に大連で生まれたが、二〇（一九四五）年に兄弟4人と母で引き揚げる。佐世保で四〇日間、一日に魚一匹とおじやだけで暮らす。母村に戻ってから、そこで小学校、近隣の集落の中学校卒業後、しばらく父方叔母の旅館を手伝っていた。昭和三一（一九五七）年一二歳の時に大阪の同郷のおじさんを頼って行く。昭和三八（一九六三）年、尼崎の寮母をしていた時、近隣の集落の人がいて、地元の中学で今の夫の弟と同級生だった。その関係で知り合って、結婚した。昭和三八（一九六三）年にケース7、8に折伏された。信心のおかげで、二週間で初信の功德をいただいて蓄膿が治

った。

調査時の平成一〇（一九九八）年、夫は〇〇本部〇〇西支部副支部長を昭和五三（一九八六）年位から二〇年務めている。地区は、団地地区で、この中では一番古い。毎朝の勤行は欠かさない。同じ地区内の人の世話をしている。同じ団地内に二ブロックある。最近になってようやく折伏した。貧乏と蓄膿、病をお題目で治した。宿命を切るのに七年かかった。

夫は、近隣の集落出身の親で昭和九（一九三四）年に大阪で生まれる。小学校五年の時に空襲が激しいので母の妹のいる鹿児島へ家族で疎開したが、高等小学校一年の時に、終戦を迎えて、奄美に帰村した。昭和二四（一九四九）年、高等小学校二年生の時に新制中学校が始まり、新制中学一年生になった。卒業後二一三年、そこで鯉漁業「エサ場」でカツオ用の餌を捕っていた。

昭和二六（一九五二）年、一八歳の時に、沖縄で半年土木作業の手伝いをした、兄は既に沖縄で特別警察隊にいたので、その紹介で、アメリカ人が個人営業する軍直属修理工場MKチャチャンで修理工をしていた。パ

スポートを持って、昭和二八（一九五三）年一〇月に、すでに手紙でお願いしていた叔父（母の弟を頼って大阪へ渡る。

叔父はその頃、尼崎製鋼所（後に合併して神戸製鋼）に勤めていた。試験を受けたが、落ちてしまったので、昭和二九（一九五四）年四月に、久保田鉄鋼所武庫川工場に勤めた。そこは、近隣の集落出身者で兄の先輩の紹介で、兄嫁の遠縁にもあたる人だった。そこには一〇年間勤めていたが、その間にクレーン運転の免許をとった。

昭和三四（一九五九）年に、母親の紹介で創価学会に入信した。昭和三五（一九六〇）年、久保田鉄鋼所時代に、近隣の集落出身の先輩がおり、その気心にはだされて熱心に信心するようになった。

昭和三九（一九六四）年、枚方工場ができて、そちらに移動しなくてはならなくなったが、尼崎から遠く、もし通うとなれば朝五時に起きなければならなかったので、希望退職した。そして、大阪住友金属製鋼に入社した。臨時採用に対して、紹介があったけれど試験があった。

一二〇名中一二名の難関だった。給料は二五〇〇〇円とよかったが、変則勤務で体調を崩して辞めた。

昭和四一（一九六六）年、大林組関係の下請けの建築会社でクレーン運転者として就職した。七年間勤めたが、会社が倒産してしまった。その後二年間に、青木建設、ダイワ重機に勤めた。その後、尼崎日野工場に七年間勤めたが、倒産してしまった。龍岡建設にも勤めたが、仕事のストレスで肝臓を悪くして大手術をし、二―三回入院した。六二歳の時に退職し、年金暮らしをしている。

5 カトリック信者の生活史

ケース15・16

夫ケース15は、母村で次男として大正一一（一九二二）年に生まれる。長男はすでに死亡している。長女は母村出身者と結婚している。その夫は近隣の町で商店を、母村では民宿を営んでいる。自分は結婚と同時に、父の弟の養子となり、今の姓を継いでいる。

大正一四（一九二五）年に、母村の尋常小学校を卒業す

表2. カトリック信者、宗教無所属者のインタビュー調査対象略歴

ケース番号	生年	最終学歴	結婚	入信年	入信地	媒介者	理由	その他	88年職種
カトリック									
15	1922	高等小学	1951 (29)	1957	母村	母村集団洗礼			大工
16	1918	高等小学	1951 (33)	1957	母村	母村集団洗礼			主婦
17	1908	尋常小学	1935 (28)	1955	母村	No.21の兄			主婦
18	1926	高等小学	1948 (22)	1957	母村	母村集団洗礼			大工
19	1930	高等小学	1948 (18)	1957	母村	母村集団洗礼			主婦
無所属									
20	1919	高等小学	?					妻N集落	飲食店主
21	1929	高等小学	1952 (23)					妻N集落	小学校長
22	1924	高等小学	1950 (26)					妻奄美	会社役員
23	1927	高等小学	1949 (22)						会社員
24	1927	高等小学	1949 (22)						会社員
25	1929	高等学校	1953 (24)					妻沖繩	従業主
26	1929	高等小学	1957 (28)					妻奄美	従業主
27	1930	高等小学	1958 (28)					妻奄美	従業主

る。昭和二（一九二七）年に高等科を卒業し、そのまま母村で農業をする。昭和九（一九三四）年、郷友会の実力者で公務員の長にまでなった人を頼って大阪に出る。しばらくその実力者の所に下宿していた。その人の紹介で造船所に勤めた。昭和二六（一九五二）年にケース16と結婚する。戦争中に母が死んで、奄美の人間は行政権分離になり、帰らなければいけない雰囲気だったので母村へ帰った。帰って農業をしながら、子どもを育てる（全員、母村小学校―俵中学校―古仁屋高卒）。

数えて五一歳の時、昭和三八年に妻とともに大阪に来る。さきの実力者の紹介で日石のガソリンスタンドに一三年間勤める。昭和五一（一九七六）年に退職し、その後一年間ペンキを造る会社勤めたが一年で辞めた。昭和五五（一九八〇）年以来、年金生活を送っている。

妻ケース16は、ケース12、13、25と同じ一族で、大正六（一九一七）年に長女として生まれる。母村尋常小学校尋常科を昭和四（一九二九）年に卒業する。高等科に進んだが、一年半で中退し、龍郷町に機織の修行に出かけた。そこに一年半くらいいたが、母村に戻った。

一八歳の時、昭和一〇（一九三五）年頃、長兄を頼って、尼崎に単身で行く。兄と同居して、ガラス会社に三年位勤めた。

昭和一五（一九四〇）年、数えて二二歳の時に、叔母と夫ケース15の兄の取り計らいで結婚し、此花区に住んだ。昭和一六（一九四二）年には長女が誕生した。その後、曽根崎付近に移ったが、戦災で焼け出され、此花区に舞い戻ってきた。

終戦となり、昭和二二（一九四六）年、次女が生まれた。大阪にいても物資に困るので、特に、これから冬になり着る物もなく、寒くなるだろうと思って母村に一家で引き揚げた。

母村では、自分たちの食物を自分たちで作って食べていた。しかし、昭和二二（一九四六）年に帰ってから一七―八年目頃（昭和三八―三九年―一九六三―六四年）から米も野菜も買って食べるようになった。その頃になると、それまで主食の一端を担っていたイモも豚の餌にしていた。

カトリックへの入信は、昭和三二（一九五七）年に家族

全員で集団洗礼（八九名）を受けてからだ。それまで、母村の「易者」（これまで「占い師」として本稿に紹介していた）の所に毎月一日に集まってお祀りごとをしていた。その当時、神父の話を聞いたりしていたが、その後、神父と易者が一つになった。昭和二八（一九五三年）三女が四歳の時に、「易者」が希望者はカトリックになるようにいった。私は、神父の話を聞いたり、本を読んだりしたら、これから子どもへの教育に役立つと思い、洗礼を受けた。易者の所に通っていて、洗礼を受けたのは私くらいのものであった。

死んだら天国に行ける事を信じて、自分自身の心の修養にしている。カトリックは素晴らしいと思っています。

母村では主として農業をしていた。長女は、母村小学校卒業後に近隣の集落の中学に進み、中学を卒業すると昭和三一（一九五六年）、大阪に働きに出た。次女も、同様にして、昭和三六（一九六一年）、大阪に出た。次女はしばらく長女と同居していたが、昭和三八（一九六三年）に長女の結婚とともに、一人暮らしを始めるように

なった。一人では、淋しくて怖いというので、母村を離れ、一緒に暮らすようにした。

ケース15は、昭和九年から二十二年（一九三四―四六）まで大阪にいたことがあるので、大阪には詳しい。次女の様子を見に行くつもりで出かけて、そのまま住む事になった。その時、遠縁に当たる郷友会の実力者に頼んで夫の仕事を見つけてもらい、ガソリンスタンドを紹介してもらい、そこで一三年間働いた。

大阪に出て来ても、自分たちは教会に出ている。子どもには全員洗礼を受けさせたのに、孫ができてから出て来ない。教会は駅の側の茨木教会に通っている。毎週ミサを預かっている。しかし、三女や次女は茨木駅の近くに住んでいるのに出て来ない。

母村に家の墓があり、現在、被葬者の甥に見てもらっている。位牌は、妻が大阪に出て来た時に「供して」（持つて）きた。

孫が小さいうちは大阪に住もうと思っている。長男が結婚して、その子の手がからなくなったら母村へ帰ろうと思っている。母村には宅地がある。空襲で焼

けてしまったが、昔は小学校の校長が泊まるくらいの立派な家だった。今、母村に家を建てたとしても、木造だと人が住まないとすぐ腐るし、コンクリートだと税金がかかる。それに息子が将来母村へ帰らなければ無駄になる。

昭和五六（一九八一）年六月に母村に戻った時、カトリック信者の中心的な人から引き揚げてくるように頼まれた。三女は同じ府宮団地に住み、四女も近くに住んでいて、孫を預けに来る。まだまだこちらにいる必要がある。

カトリックに入ってから、盆・正月もやらなくなった。祖先供養を神父が認めてくれるので、カタガシやフトウムチ（落雁と求肥鮓に近い奄美の伝統的な菓子）だけは供えている。カトリックになって良かった点は、良い日や悪い日を気にしなくてすむようになった事。天候の良し悪しだけで仕事に出かけられるし、何でも判断できる。また、安息日を守るようになった。

母村に戻っても信仰には困らない。かえって親しみがます。祖先を大切にできるし、祖先が一番。カトリ

ツクでも亡くなった人のお祭り(万霊節)を一月にするので良い。毎朝お祈りをあげている。神に近いから、横道にそれない。心の修養になる。酒を飲んで言葉が荒くなった時、翌朝起きて反省をするようになった。

郷友会は、敬老者として招待されないで行かない。親戚に招待される人がいれば参加する。しかし、自分の身近に親戚がないから、また、その親戚から連絡がないのでいかない。でも、総会には毎回参加する。去年は身内に不幸があつたので(喪中で)行かなかった。行くと同級生や故郷の人に会えるので楽しい。

妻のケース16は、袖を織っていたが、最近肩が凝って、目が疲れるし、売れないので止めた。阪神でも郷里から材料を取り寄せて織っていた。夫婦共に年金以外の定収入は無いが、家賃は月二二〇〇〇円で助かっている。

ケース17

ケース17(女性)は、明治四一(一九〇八)年生まれ、尋

常小学校卒業とともに家で家業を助ける。家では小学校教員を下宿させていたため、先生の賄いをしていた。昭和五(一九三〇)年、一二歳の時に兄、続いて父が病気で死んだ。母を残して、数え二五歳の時に郷里出身の齒科の開業医を頼って(先述)大阪に単身で出た。昭和六(一九三二)年八月には、種子島から朝鮮半島の教員に赴任した母村出身者の所に賄いとして行つた。なぜなら、その妻が初産だったからだ。

しかし、あまりにも寒いので母村に帰った。その途中、鹿児島島の叔母の家にいた。数え二八歳の時、母村で、昭和一〇(一九三五)年、そこで生まれ育った人と結婚した。

カトリックに入信した理由

二五歳の時に風邪を引いて寝ていた。からだの具合が悪い時に、おばさんである「易者」に判断させた。神様が護ってくれるから、水神を拝めと言われた。ユタの口を借りて、曾ばあさんが出て来て、神箸、うちわ二つを簞笥の底に隠していた、それを出して氏子(集落

の人）に拜ませてくれとユタの口を借りて言った。その通りにして、朝夕線香を焚いて花をあげたら体が良くなった。今日あるのは、そのお陰だ。白い着物を着て二―三回神祭りにも出たことがある。易者のお告げで、水神を拜んでいたから、結婚できなかった。夫は年下だけど結婚した。

カトリックには、母村の有力なカトリック信者（ケース21の兄）に勧められて入信した。昭和二五（一九五〇）年八月のジェーン台風で、家が全壊し、三男も入院し、近隣の町と母村を行ったり来たりして、大変だった。昭和三〇（一九五五）年に入信した。現在でもカトリック教会に毎週行っている。

ケース18・19

夫ケース18は、昭和元（一九二六）年、母村で誕生した。父が大工だったので見よう見真似で覚えた。昭和一六（一九四二）年、母村の尋常小学校高等科を卒業したが、そこで大工や農業、漁業、道路工事をしていた。昭和二三（一九四八）年、二六歳の時に母村のケース19と結婚

する。翌年、長女が誕生する。

昭和二七（一九五二）年、半年間、沖縄に家族を残して単身で出稼ぎに行く。軍関係の仕事で主に大工をしていた。いま（第一回調査時）母村に住む神社の社守ともう一人の出郷者と自炊していた。昭和二八（一九五三）年、母村にいた時に大火災にあった。その年には神社で復帰祈願断食も経験した。

昭和三二（一九五七）年、二九歳の時に集団洗礼を受けた。その直前に長男が誕生する。

昭和三六（一九六一）年、三五歳の時に、母方のイトコであるケース20を頼って、家族を残して単身で尼崎へ移動する。ケース20は当時（第一回調査時）ホルモン焼き屋をしていた。その友人の仕事で二―三ヶ月したりして、二―三年尼崎でふらふらしていた。同郷出身者の友人は自分よりも一年早く大阪に来て、大工として○工務店に勤めていた。その友人に頼んでその工務店に紹介を頼み、入れてもらった。その後、母村出身者も入って来た。その時、大工仲間が独立するのでその友人とともに一緒に引き抜かれた。

昭和三八（一九六三）年に家族を尼崎に呼び寄せた。

昭和五七（一九八二）年は「□□工務店」で働いていた。

母村出身の大工仲間は守口市に一人（一九二七生）、旭区に五名、大東市に一名いて、相互に大工仕事を紹介し合っている。

ケース19

ケース18の妻は、昭和五（一九三〇）年、長女として生まれる。全部で八人兄弟姉妹（三男五女）である。今の姓は祖父（大正一五〥一九二六年死亡、母村に墓）の時からで、もともとはM一族だ。

母村の国民学校初等科を昭和一七（一九四二）年に卒業後、高等科に進み、昭和一九（一九四四）年に満一四歳で卒業する。その後、家の手伝いをし、一八歳の時、昭和二三（一九四八）年にケース18と母村で結婚し、翌年、長女を出産する。昭和三一（一九五七）年に夫と自分と長女と、先月生まれたばかりの長男とで集団洗礼を受ける。

昭和三四（一九五九）年に、夫は単身で沖縄に出稼ぎに

行く。その間、母村で農業をしながら子どもを育てる。その後昭和三六（一九六二）年、夫に呼び寄せられて家族で大阪旭区へ移住した。その年に大阪で次男を出産する。

母村出身の経営する製針所にパートとして勤めたことがある。また、その後、クリーニング店店員や製薬会社にはパートタイマーとして勤めていた。

6 宗教無所属表明者の生活史

ケース20・ケース21

ケース20（男性）は、大正八（一九一九）年に母村で誕生する。昭和八（一九三三）年、母村の尋常小学校高等科を卒業する。卒業して翌年の昭和九（一九三四）年に阪神に出てくる。昭和五五（一九八〇）年調査当時、大衆食堂のような飲食店（ホルモン焼き屋）の経営と調理をしていた。仏壇を毎日拝んでいる。また、火を扱う仕事をしているので、荒神さん〓火の神を、近所の神社からお札を買って拝んでいる。位牌には戒名がついている。尼崎市にある浄土真宗西本願寺派〇〇寺と関係がある。父

の骨は母村に預けてある。それと同時に西本願寺にも分骨してある。

正月は母村式の「サンゴン(三献)」「祝宴」をする。経営する食堂でも、奄美の人に祝い事を頼まれてすることがある。母村で拜んでいた、「セクの神(大工の神)」は山の神だと思う。

昭和五六(一九八一)年頃から、商売が芳しくない。借金で郷友会の人にも迷惑をかけた。また、喘息を患い、現在の生活は大変だ。昭和五九(一九八四)年に妻が、脑梗塞で倒れた。幸い長男夫婦と同居しており、近くに、子どもたちがいるので助かった。その後、細々と店をしながら生活していたが、平成七(一九九五)年に阪神大震災にあい、テント暮らしを余儀なくされた。幸い人に貸していた家が空いたので、平成八(一九九六)年三月一日に帰郷した。六二年ぶりに「シマ」(母村)に帰って生活した。昔と違って、近隣の集落に病院があり、デイケアもそこでしてくれるし、平成一〇(一九九八)年に隣の集落にも町立老人ホームができて、そこにもデイケアセンターができた。

母村での生活は自分でもしなければならぬ。大変だけど楽しい。郷里に帰って喘息も良くなり、元氣になった。尼崎にいた頃は、がんばっている姿を見せたくなくて硬くなっていたけれど、ここに来てそれも無くなった。尼崎では夫婦で座っていても会話がなかったが、ここに来て増えた。

「シマ」(集落)の人も温かく迎えてくれた。「ユイワク」(元来の意味は労働交換、現在ではボランティアに近い)で引越しを手伝ってくれた。フェリーが欠航しても、貸し切り船を用意してくれ、庭の草取りもして、海から石を入れてくれた。

旧暦の一、一五日は必ず墓参りに行く。母村の墓地は花だらけだ。留守の人のお墓もみて回る(拜んだり、掃除したり、庭の草花を飾る)。自分自身は墓の管理を人に任せっぱなしだったが、大変だと反省させられた。

田舎(母村)に来て、朝五時に起きて支度をし、六時に神社で教会の鐘を聞くと平和を感じる。学校からワキン浜まで歩く。教会の鐘は郵便局長夫人が精確に時間通りに鳴らしている。

鹿兒島出身だがある年取ったおばあさんが「シマ口」(方言)で見知らぬ自分に挨拶して、話しかけてくれた。最近東京から引き揚げてきた人は母村の人との交流を知らない、できないので退屈していたと思う。田舎では人と会わなければ、退屈する。それでも退屈すると近隣の集落のフェリー乗り場に行つて、人の出入りをみていた。多分活気のある尼崎へのホームシックだろう。

ケース21・22

ケース21は、母村にて大正一〇(一九二二)年に、明治一九(一八八五)年生まれの父と母の五男として誕生する。兄弟姉妹は、長男は明治四三(一九一〇)年生まれ、次男は大正四(一九一五)年、三男は大正六(一九一七)年、四男は大正八(一九一九)年、長女は大正一二(一九二三)年、次女は昭和四(一九二九)年、三女は昭和一二(一九三七)年であり、五男三女である。二、三男は、結婚前に死んだ。

父は、大正時代にも、昭和一五、一六(一九四〇、四二)

年にも母村の長をしていた。また、弟のカトリック信者も昭和二一、二七(一九四六、五二)年に母村の長を経験している。母村の家は現在この兄が継いでいる。母村には次女が住んでいるが、それ以外は全員阪神地方に住んでいる。

昭和一二(一九三九)年、数え一五歳で母村尋常小学校高等科を卒業すると、既に大阪で働いていた父と長男を頼つて単身で向かった。関西大学の付属高等学校に入学したが、昭和一九(一九四四)年、戦争が激しくなり、母村へ疎開した。また、大阪に戻るつもりでいた。

戦争中は、近隣の集落の海軍で月二〇〇円の給料をもらい働いていた。終戦後、母村で昭和二五(一九五〇)年まで小学校の教員をしていた。阪神地方に住む友人や母村に住む友人らと青年団活動に熱中した。当時青年団長をした。昭和二六(一九五二)年、近隣の町の小学校教員となり、二七(一九五三)年に母村の〇家一族の女性ケース22と結婚した。その年に町議をしていた集落の人の父の口入れで、単身で大阪都島に残つて教員をしていた親戚を頼つて行つた。そこで教員をした。昭

和二八（一九五三）年の復帰後、妻を呼び寄せた。三〇（一九五五）年には長女が、三三（一九五八）年には長男が生まれた。昭和四五（一九七〇）年に教頭になり、五三年に校長に昇格し、定年まで勤める。

郷友会関係の仕事として、昭和三三―三四（一九五八―五九）年には会計、昭和三五―三八（一九六〇―六三）年、昭和四九―五〇（一九七四―七五）年と副会長を務めた。ある会長経験者とは同級生であり、年回りからすると会長をしなければならぬし、なるように顧問から言われたが、校長になったため無理と断った。自分がしかし一番力を入れたのが、郷友会会報であり、昭和三七（一九六二）年の創刊二号から昭和四八（一九七三）年まで一一年間携わった。宗教や政治に対して中立を保ち、読み応えのあるものにしようと努力していた。また、昭和五五（一九八〇）年の母村小学校創立百周年記念行事推進委員会の編集専門委員として、記念誌の編集をした。その前には、昭和五二（一九七七）年に刊行した阪神郷友会の記念誌「五〇年の歩み」の編集員としても活躍した。また、自分の村の歌謡にも関心があり、母村の

八月踊り唄集などを編纂している。

母村にいるすぐ上の兄、次女はカトリックだが、自分は祖先や神を大切にすることが、具体的な信仰は持っていない。

妻のケース22は、昭和三（一九二八）年、母村生まれである。〇一族の四男三女のなかの長女として生まれる。長男は母村で大工、兄は東京の郷友会会長経験者で、次の弟も沖繩の郷友会の会長経験者、さらに、一番下の弟は大学の相撲部の監督である。妹は、母の死後、昭和五二（一九七七）年時点、大阪で父と同居していた。

母村の尋常小学校尋常科を昭和一五（一九四〇）年に卒業した。尋常科制度としては最後の卒業生となった。そのまま尋常小学校から名前の変わった母村国民学校高等科に進学、昭和一七（一九四二）年に卒業する。その後、近隣の集落に嫁いだ父方叔母の所に下宿しながら、町の女学校に通う。昭和一九（一九四四）年に卒業と同時に、母村に戻る。その後、戦争を挟んで一二年母村の国民学校で教鞭をとる。その後、家事手伝いをする。この間、青年団活動をする。劇団を青年団で結成し、

小学校の再建資金を稼ぐために、近隣の村を回って上演した。昭和二七（一九五二）年に青年団員同士で結婚した。二八（一九五三）年、本土復帰してから、既に本州にわたっていた夫と大阪で生活をする。当時、大阪郵便局に地方事務官として勤務した。夫の三倍は稼いでいた。昭和三〇（一九五五）年に長女が、昭和三五（一九六〇）年には長男が生まれた。その後、吹田に引越した。カトリックの義兄の長男が大学卒業後近くのカトリック高校の教員として勤めており、その下宿先となっていた。現在、郷友会の有力者だった人が亡くなったのでその家に移った。

郷友会活動では、昭和四三―四六（一九六八―七二）、四九―五二（一九七四―七七）年と幹事の一員を務めた。郷友会活動にも積極的に参加している。

ケース23

昭和五五（一九八〇）年、母村調査時に一族の墓の新築で出会う。数十年ぶりに帰ってきて、感激していたところだった。

大正一三（一九二四）年、明治二三（一八九〇）年生まれの父と明治二六（一八九三）年生まれの母の次男として母村で生まれる。家は昭和二―三年頃（一九二七―二八）、鰹漁船を所有していたが、シケで新造船が沈んだため、破産して土地を差し押さえられた。父は、兄と借金返済のため、大阪へ家族を残して出稼ぎに行っていた。父は益済会の紹介で、日雇いとして中山製鋼に勤めた。その後、同郷の人が〇〇組を結成して働いていた大同製鋼に移った。当時、母村出身者では、圧延鋼を造るローラーの油差しをしていた（父はその後、昭和二五―一九五〇年の六一歳定年まで働く）。昭和七（一九三二）年、小学校三年生の時に父に呼び寄せられて、家族で母、姉、弟とともに尼崎へ移住する。移動してから妹が誕生する。

昭和一三（一九三八）年、尼崎の尋常小学校高等科を卒業してから、同郷の人が教鞭をとっていた大阪工学校の夜間部に通う。昼間は、東洋ベアリングの養成工員として働いていた。しかし、昭和一五（一九四〇）年、一六歳の時、戦争が勃発した。そこで満蒙開拓義勇軍に

訓練生として三年間北安省鉄麗で働き、その後、義勇軍として牡丹江摘道に行った。現地で、少年兵として野砲隊に所属した。昭和二〇（一九四五）年十一月、朝鮮半島を敗残兵として山中を彷徨している時に、武装解除され、三年間シベリヤに抑留された。その間、「優良作業者（ハラシヨサポターレ）」となった。昭和二三（一九四八）年一〇月二五日に引き揚げるまで、現地で、労働と同時に、共産主義教育を受けた。「搾取」という言葉を学び、正直に働いていた親父がかわいそうに思った。その間、昭和一八（一九四三年）、兄は死亡していた。

共産主義教育の結果、日本を救う使命を感じて帰国した。日雇いの土方として働いていたが、金を稼ぐことだけが目的の仲間と意見が合わなかった。働いたが、他の人は金欲しさだけに働いており、就職すると同時に、労働組合を通して共産党のオルグ活動をしていた。父親の友人で近隣集落出身者に紹介してもらい、淀川製鋼に就職した。弟は、病弱で挺身隊で戦時中、協和造船に勤め、戦後、阪神電車に勤めた。自分が就職した一年後の昭和二四（一九四九年）、弟も勤めはじめ、弟

は定年まで働いた。自分は、日鉄や富士鉄で一ヶ月ほど働いた。その時、高槻農村工作隊長として、ジェーン台風の時代、警察に追われたこともある。

しかし、昭和二五（一九五〇）年、圧延工から精製工に替わった時、弁膜症にかかった。その時、淀川製鋼で組合活動の書記長がマツカッサーのレッドパージで会社を首になり、〇〇シャッターの会社を起こすという事で、引つ張られた。一〇月に結婚してから移った。

昭和二七（一九五二年）には、家屋を買い、二九（一九五四）年には土地も手に入れた。この頃、組合活動をしていたため、郷友会とは無縁だった。昭和三〇（一九五五年）、六全協に反対し、職場に帰るべし、と思い脱党した。その後、順調に会社で出世し、退職時には〇〇シャッターの重役となった。

郷友会は共産黨員だったため、参加できなかった。脱党後、五五（一九八〇）年頃から参加しており、年功序列からいって、当時会長をするようにいわれたこともある。しかし、会長は、自由な時間の多く持てる自営業ではないと成り立たない。自分はサラリーマンをし

ていたため、無理だと思った。また、地区で、趣味のハイキング会のリーダーをしていることもあってなおさらできない。先日も自分が責任者となって企画したハイキングの時に、母村出身者の葬式に参加できなかった。急に故郷が懐かしく、三味線を買って自分で弾いている。本棚にも奄美関係の本が四―五冊揃えてある。

一度、母村にある五〇坪の土地を小学校拡張のため、母村の人から売ってくれと言われたが、断わった。しかし、村の人から再度願い状が届いたが、祖先代々の土地、小さいが、親が汗水垂らして開墾して私を食わせてくれた土地は売れない、と断った。売っても金にはならないけれど。また売ったとしたら周りがうるさい。結局、代替地を提供してもらうことで決着がついた。僅かな土地があるというだけで、心の安心に繋がる。もし、世界大戦が起きたら、逃げ隠れる所がある。趣味の山歩きは、緊張の解消に効くけれど、母村の土地は精神的支柱として残しておく。帰っていいところがある、というだけで安心。母村では昔から唯一の財

産と呼べるものは土地だった。

今住んでいる町は、自分の親から数えて二代目であり、ガキ大将として子どもの頃から知られてきた。自分の家の建て替えの時、普通は協力しないのに周りの住人が協力してくれた。

昭和五〇（一九七五）年、母が死亡した。その二年前には父が死亡しており、核家族となった。

ケース23の妻は、近隣の集落出身者である。昭和二（一九二七）年にそこで生まれ、その集落の尋常小学校及び高等科を卒業と同時に、大阪にいる伯母（母の姉の所に単身で移動する。夫は鉄鋼所で働いており、既に兄とイトコが伯母のところに下宿しており、私は家事手伝いをしていた。NHKの小田出張所に勤めたこともある。半年ほど、東京にいる叔父（母の弟、一九八〇年に死亡）に厄介になったこともある。戦争中も戦後も大阪に残っていた。

昭和二五（一九五〇）年、数えて二四歳の時に、夫の両親と、私の親が遠い親戚（ハルチ）で見合いをして結婚し、尼崎に住んだ。昭和二六（一九五二）年に長女、昭和三〇（一

九五五)年に次女、昭和三九(一九六四)年に三女が生まれた。一時、母村にいる母の世話をするために、昭和四八(一九七三)年まで、次女が高校を卒業する時、子どもを連れて帰っていた。昭和五〇(一九七五)年に父が死亡、五二(一九七七)年に母がそれぞれ母村で死亡した。昭和五五(一九八〇)年に次女は尼崎生まれの人と結婚した。

母村の人とは、会合の時に会うぐらいで特に日常的な付き合いは無い。四〇歳まで夫の親は母村にいて、その後、尼崎に移って一緒に住んだ。年寄りと暮らしていたため、正月は母村式の若水とりと三献(サンゴン)をする。近くの神社から、火の神である荒神さんの御札をもらって奉つてある。

夫の両親が近くの浄土真宗西本願寺派〇〇寺の檀家(ケース20と同じ)になったため、お骨は寺に預けてあり、彼岸、お盆には必ずお参りにいく。両親の遺骨を分骨して、京都の本寺に預けてある。大阪にはまだ墓は無い。家の墓を母村に造った時は、寄付をして、建立のお祀りに参加した。第一回調査当時、両親、未婚で死んだ姉、兄の位牌を祀っている。全部に戒名が書いてある。

ケース23・24

ケース23は、S家一族の父の五男として誕生する。長女、長男は子どもの時に死んでいるため、実質四男である。次男は昭和五五(一九八〇)年の調査時、大阪に次女と一緒に生活している。三男は沖繩で、四男は母村にいる。六男および三女も大阪にいる。

ケース23の父は、母村区長を大正年間に一度務めたことがある。記録に残っている資料では、昭和二一五(一九二七―三〇)年まで務めた。曾祖父は「オオザシヨ」を持つ易者であった。

昭和五六(一九八一)年の第一次調査時点で、ケース23は昭和五二(一九七七)年三月にすでに死亡していた。そこで、ケース24の妻から夫の話を尋ねた。

夫であるケース23は、昭和二三(一九三八)年、母村尋常小学校を卒業し、そのまま高等科に進学し、昭和一五(一九四〇)年に卒業した。卒業後は、しばらく家の農業、米、砂糖黍栽培を手伝っていた。

昭和一九(一九四四)年、一七歳の時に、母村の同級生と一緒に海軍に志願し、長崎佐世保に向かう。昭和二

○(一九四五)年、一八歳の時に終戦を迎え、母村に帰村する。その時、ケース21の兄嫁と一緒にだった。そのまゝ母村で、家業の農業をする。

昭和二四(一九四九)年二二歳の時に、同村のケース24と結婚する。昭和二五(一九五〇)年に長男が誕生する。続いて、昭和二七(一九五二)年に長女が、昭和二九(一九五四)年に次女が誕生する。三女が昭和二三(一九五八)年に誕生する。昭和三四年から三五年(一九五九―六〇)まで母村の長を務める。

昭和三六(一九六一)年三四歳の時に単身で大阪に出稼ぎに行く。尼崎の兄夫婦ケース7・8夫婦の所に下宿しながら。鉄骨の足場を組む時に用いるパイプを作る会社、住友日本ビデイ(ケース8もアルバイト)に母村の人と一緒に試験を受けて入社する。

昭和四〇(一九六五)年、長男が中学卒業とともに就職のために大阪に来て、一緒に暮らす。だが、昭和四二(一九六七)年、妻、長女、次女、三女とともに尼崎に来て家族で暮らす。

昭和四七(一九七二)年に会社が滋賀県に移転した。尼

崎から遠いので、夫とは一時別居して暮らす。昭和五二(一九七七)年、母村の人が三―四人勤めている〇〇電子(大阪)に転職するが、その一週間後に急逝する。

ケース24

昭和二(一九二七)年、両親とも母村出身者で次女として母村に誕生する。長女、三女、長男とケース24の四人兄弟である。平成八(一九九六)年には三姉妹とも母村で健在であった。

母村の尋常高等小学校高等科を昭和一五(一九四〇)年に卒業し、その後、家業を手伝う。昭和一九(一九四四)年に一年間、女子挺身隊として大阪で働く。しかし、終戦で母村に戻る。

昭和二四(一九四九)年、二二歳の時に同級生のケース23と結婚する。

夫が急逝した後、パートで働きはじめた。その後、昭和五一(一九七六)年、長女が四国出身の人と結婚する。続いて、昭和五二(一九七七)年、長男が埼玉県出身者と結婚する。昭和五五(一九八〇)年、次女が母村出身の二

世と結婚する。三女が昭和六〇（一九八五）年に無事に結婚し、子育てがようやく終わった。

昭和五八（一九八三）年一二月に母村に家が新築され、翌年の年七月に子も巣立ったので引き揚げた。夫が生前から帰ると言っていたが、その時自分はあまり賛成ではなかった。しかし、骨を埋めるところは生まれたところ以外はないと思った。夫の骨も生まれた母村に埋めたとし、子どもたちも全員結婚したので、いつ迎えが来てもいい。経済的に母村はいい。持ち屋なので家賃はいらないし、食べる野菜は自分で作れるし。昭和五九（一九八四）年に大島紬を一匹一三万円で織っていた。一ヶ月以上かかり、大変なのに安い。紬の機織は、シマを出る前に習い、尼崎でも織っていた。

母村では、結構、集落作業が大変だ。婦人会の川の清掃、町の体育祭、母村内の美化作業、お盆、慰霊碑の建立記念式典など年中行事が多い。子どもたちが孫をつれて遊びに来るし、楽しいし、これから内地と行き来したい。

自分の子どもたちの個人生活史については、子ども

は全員母村で生まれた。長男は昭和三七（一九六二）年に母村小学校を卒業、続いて近隣の中学を昭和四〇（一九六五）年に卒業し、その後尼崎で父と同居している。同郷者の世話で一―二年働いた後、近隣の町の人の紹介で、東京板橋のラーメン会社に就職した。五二（一九七七）年に埼玉県出身の人と結婚し、翌年には長女が誕生した。

ケース24の長女は、母村小学校を昭和三九（一九六四）年に卒業し、その後、中学三年の一学期に尼崎の中学に転校した。中学卒業後に、三年間洋裁学校に通い、その後、母村出身者の歯科医院の受付を二年間勤めた。その後、一般募集で大阪福島区の洋裁店に仕立ての係として勤めた。昭和五一（一九七六）年に四国出身の人と結婚し、東大阪に住んでいる。

ケース24の次女は、昭和二九（一九五四）年に母村に生まれ、その小学校を卒業し、中学一年の時に尼崎の中学に転校した。その後、甲子園の女子高校を卒業後、学校の紹介で事務職に就いた。その後、二―三回職場を変わって、地元信用金庫事務センターに昭和五四（二

九七九年から勤めた。昭和五五年に結婚した。

三女は、昭和三三（一九五八）年母村で生まれ、小学校二年生の時に尼崎に転校した。尼崎で中学、高校を五一（一九七六）年に卒業後、すぐに母村出身者の勤めている〇〇電子（父と同じ会社）に就職した。昭和六〇（一九八五）年に九州出身の人と結婚し、フォローアップ調査時には千葉県に住んでいる。

ケース26（ケース12、13と父方のイトコ同士）

ケース26は、昭和四（一九二九）年に母村で、母村出身の父と近隣の集落出身の母との次男として生まれる。兄弟は、長男（大正二二―一九三三年生まれ）、長女（昭和六一―一九三二年、同郷人の歯医者と結婚）、次女（昭和一〇―一九三五年生まれで大阪出身者と結婚）である。父方の祖母はノロ（女性祭祀者を司っていた）。

戦時中、昭和一六（一九四二）年に母村国民学校初等科を第一期生として卒業する。高等科に進み昭和一八（一九四三）年に卒業する。卒業と同時に、母村に募集に来ていた大阪の金属加工会社に入社する。ここには付属

の工業学校があり、全寮制であった。母村出身者は自分だけだった。昭和二〇（一九四五）年には、八尾の大和川航空機製作所（後のダイキン製作所）に勤務した。そこで終戦を迎えた。

昭和二一（一九四六）年、小学校卒業前から単身で大阪の鋳物工場に出稼ぎに来ていた父親と母村に引き揚げた。二―三年間（一九四六―四七）、疎開小屋で父親と二人で、墜落したグラマンの破片を集めて、鍋や釜を鋳造して販売した。

昭和二二―二三（一九四七―四八）年、父はグラマンの破片が無くなったので、今度は近隣の町で真鍮部品の製造を始めた。父は大阪に行く前はそこで鋳物屋をしていた。この間に、村立実業高校に通う。母村出身の同窓生にはケース3ともう一人がいた。

昭和二三（一九四八）年の卒業後、この町の印刷所に勤める。昭和二四（一九四九）年、この町の水産試験所に就職した。この年に父が自分の為に家を建ててくれたが、その後七月に他界した。

昭和二五（一九五〇）年三月、妹を高校に入学させ、家

の畳を新しくはりかえ、水産所を辞めて、大阪に密航した。当時、校長の給料が二三〇〇円だったのに対して水産所の給料が二一五〇円で当時としては破格の給料だった。密航代として鹿児島―奄美で三六〇円払った覚えがある。

昭和二五（一九五〇）年一〇月に大阪の同郷出身者が経営する歯科医院を頼って行った。姉がその息子と結婚していたから。昭和二六（一九五二）年母村出身者が吹田で開業していた歯科医院の出入り業者、岡山歯科用品販売会社に紹介してもらって就職した。その後、昭和二七（一九五二）年夜間高校二年に編入学し、翌年に卒業した。その頃、奄美大島復帰運動をする。

昭和三〇（一九五五）年一〇月に名瀬出身の妻と結婚する。母村から母を呼び、同居する。

昭和三二（一九五七）年に吹田で独立して、自営をする。この年に長男が誕生する。その二年後に次男（一九五九）、さらに二年後に三男（一九六二）が誕生する。長男は歯科大学を卒業し、歯科医院を開業している。次男は東大文学部仏文科を卒業し、就職した。三男も歯科大学を

卒業し、兄と一緒に仕事をしたり、他の歯科医院で働いていたりしているが、平成一一（一九九九）年には独立して開業する予定である。

大阪に他の母村出身者と共同して昭和三三（一九五八）年に墓地を購入した。毎朝毎夕仏壇に向かって拝み、祖先に対する信仰は厚い。平成二（一九九〇）年頃まで、長男夫婦と同居していたが、開業と同時に車で二〇分くらいの所に住むようになった。次男は大学から東京で暮らしている。三男は実家近くの貸家に住んでいる。次男は、会社を辞めて幸福の科学の信者となった。歳をとったので家業を縮小して経営している。平成六（一九九四）年頃から、慶応大学通信教育部に入学し、年に一度スクーリングのために東京に来ている。

百歳を超える母と同居しており、その世話が大変だが、幸せな生活をおくっている。

郷友会関係の仕事では、昭和二四年から三〇年（一九四九―五五）まで幹事および青年団長を務めた。その後、昭和四〇年から四二年（一九六五―六七）までは幹事長を、そして、昭和三一（一九五六）年は副会長が急逝し、その

後任を務めた。その後郷友会創立五〇周年の記念誌編纂の仕事も務めた。平成七（一九九五）年には、ずっと固辞していた会長についた。平成一六（二〇〇四）年には、この集落の郷友会の上位団体である関西〇〇会の会長に就任した。これら同郷出身者の会合に尽力すると同時に、昭和三〇（一九五五）年から毎年母校の小学生たちに歯ブラシを無料でプレゼントしている。

ケース27

昭和四（一九二九）年母村生まれ、母村尋常小学校高等科二年を卒業してから、門司の海洋少年団の募集に応じて行った。すでに兄二人がおり、将来アメリカに行きたいと思って入隊した。門司の錬兵場で機関員としての訓練を受けた。昭和一九（一九四四）年に実戦に配備され、第三次、四次ソロモン海戦に参加。君津丸、上陸舟艇を積んだ一万二千トンに乗船していた。昭和二〇（一九四五）年四―五月、一六歳の時、沖縄上陸作戦に参加のため出航したが、須磨沖で機雷に触れて沈没した。救助され、神戸の旅館に収容されている時に終戦

を迎える。軍属はアメリカ軍が殺すとの噂を聞き、鹿児島まで二〇日かけて歩いて行く。

鹿児島で、母村出身の兄弟と会い、一緒に船を借りて山川港から一〇月五、六日頃、五〇人ほどで密航した。ヨウガ島付近でエンジンが壊れて三日間ほど漂流をしていたところ、一〇月一日台風にあった。船室で夜寝していると波がかかって目が覚めた時は船がひっくり返っていた。自分はもうダメだと思った。しかし、海水の中で目を開けると目の前に白いロープがあり、それにつかまったら海面にでられた。奇跡が起きたと思っている。この白いロープが一瞬自分の家で祀っていた白蛇に見えた。一〇歳の時に母が死んだが、三―四歳の頃、家の前のシダラの木が台風で倒されて、その木に住んでいた白蛇が家に住みつくようになった。母は白蛇を「ミーさん」と呼んで家の主として大切に祀っていた。御嶽大神がついている。船底にいた四八人が死んで波に浚われて行った。今でもよくこのシーンを思い出す。

自分のほかに八人が助かった。その内の一人は乳飲

み子を抱えた同集落出身者の妻だった。米俵に着物がひっかかっていて子どもは抱いたまま溺れ死んでいた。四日目から、この女性の乳を飲ませてもらい、飢えをしのいだ。一週間ほど漂流したが、八日目の朝、気がつくとも目の前の波間に三センチほどの船影が見えた時は、嬉しかった。一〇隻のアメリカ軍船団で、それに助けられた。屋久島で降ろされて、鹿児島テンボウ山の奄美人の収容所に入れられた。そこを抜け出し、金がないので密輸船に乗り込み、給仕をしていた。

二二歳、昭和二六（一九五二）年に法事のために会社を辞めて母村に行った。そして三ヶ月ほど滞在した。その後、親戚の紹介で守口の攝津製紙に住み込みとして就職した。二四歳頃パチンコに夢中になり、退職した。その後、パチンコ店に住み込みで働いた。人に使われるのが嫌で、尼崎のパチンコ店のマネージャーになった。

昭和三二（一九五七）年、二八歳の時に、結婚した。妻は、中学卒業とともに集団就職で沖永良部から大阪に来た。神戸のパン屋に就職の予定だったが、手違いで就職

できず、しょうがないので、自分のいるパチンコ屋に勤めた。親に反対されたが、社長の口利きで結婚した。同時に住み込みから近所のアパートの四畳一間に移る。二九歳の時に長女が誕生した。法事で母村に帰省するため、退職した。法事が終わるとすぐ帰った。

昭和三四（一九五九）年、三〇歳の頃、尼崎の兄の鉄鋼所に転職した。ダム工事現場で作業員として働いた。半年後、独立して淀川区佃で現場下請け作業員の口入れ業をする。

兵庫県明石の鉄鋼所で下請け作業員のまとめ役として、作業員を連れて歩いた。二〇―三〇人の工員を使い、三菱重工などの下請けをする。昭和三八（一九六三）年、三四歳の時に、不況赤字で下請けが上手くないから、解散し、自分も工員にもどる。昭和三九（一九六四）年に次女が誕生する。

昭和四一（一九六六）年、三七歳の時に大工になり、明石に住んでいたが、昭和四二（一九六七）年、妻と妻の妹が大阪（恵比須町）でスナックを共同経営することになり、大阪へ引っ越した。しばらくは明石でも大工仕事

をしていたが、大阪で大工を本格的に再開した。昭和四四（一九六九）年現在の所に焼肉屋を開業するが、夫は大工を続ける。

昭和四五（一九七〇）年に、社長が妻の焼き肉屋の常連だった大阪の〇〇基装に就職した。現場従業員の見習をしていたが、昭和四六（一九七二）年に、自営の準備として退職し、車の免許をとり、本人だけ、明石へ行き、昼間は大工、夜は車の練習をした。

昭和四八（一九七三）年に妻は焼肉屋を止め、これまでの儲けを資本金に土質改良業有限会社を設立。事務所、家とも現在の所に移った。昭和五〇（一九七五）年に借家をそのまま買い取り、新築する。昭和五三（一九七八）年に大きな仕事で一年間広島に家族で住む。昭和五四（一九七九）年この収益をもとに、株式会社組織変更する。会社の近くに自宅を購入した。

〈自分の信仰について〉

母村では、徳之島から「サトジン」という人が来て、カミサマ、アマテラスオオミカミか解らないが、家で

祀っていた。自分が物心つく頃にはいなかった。三―四歳の頃、ご飯、水を川から汲んで自分の神様に上げていた。父は嫌っていたが。

「仏教」を二〇年間勉強している、仏縁は信仰心、仏に近い人、遠い人は人の宿命みたいなもの。人の計り知れないことだ。言葉は違うけれど、自分の田舎での経験が理解できる。一四―五歳の時に学校の工作の宿題で山に竹を取りに行った時、三メートルの人形を見た。きつと、木の精霊か「諸々霊」か、寒気がして家に帰ってから三日間寝込んだ。誰にも話せない。拝み屋さんにはいつか見てもらった時、自分で思わなくても頭に諸霊が乗り移るのが頭に浮かぶ、といわれたことがある。

昭和三二（一九五七）年沖永良部出身の人と知り合い、同じ年に結婚した。そして、戦後遭難して自分だけ助かったことに関心を持ち始めた、神、ホトケのことを考えた。昭和三三（一九五八）年長女が生まれる頃、祖先を自分の手で祀りたいと思い、兄に頼んで自分で見たい（世話をしたい）と、お願いした。

昭和三六（一九六一）年には長男が、三九（一九六四）年には次女が生まれた。この頃職も転々としていた。

昭和三八（一九六三）年に神戸の霊法会に入ったこともある。全国に支部もある。

郷友会関係は、ケース25や12に勧められ、昭和六〇、六一年（一九八五、八六）と人のために会長を引き受けた。経験が少ないため、名誉会長から潰す気かとも言われた。しかし、先輩に氣を使っていたが、自分の意見を出して自主的にやるようにし、周りの人に助けられて盛り上がった。平成元年から三年（一九八九―一九九二）まで旧〇〇村会会長、平成八、九年（一九九六―一九九七）は関西〇〇会会長を務めた。貧しさゆえに、長いものには巻かれる、意識で、先輩の言うことを聞き、自分の意見を伏せていた。自分の生まれから出てくるもの、使命感みたいなものが仕事の原動力で、その仕事为天職だ。金が無くても学問が無くても社長になれる。「人のために尽くせば、人はちゃんとしてくれる」、お釈迦さんは、われの力にあらず、と言っている。お蔭様のお陰とは、祖先を表している。

世の中に偶然は無いと考えている。然るべきものが来たと思っている。阪神大震災の時も、生きているのではなく、活かされているのだと思った。

「因縁因果法」、私（ケース26）と君（筆者）が会っているのも、貧しく苦しい母村という郷土があり、そこを自分が愛していたから、安齋先生（著者の上智大学主任教授）が母村と出会い、田島さん（著者）が安齋先生と出会い、私と繋がっているからだ。先祖や神は自分といつも一緒にいる影のようなものだ。切っても切っても切り離せない。水と酒は旅をしても大切なものだ。水は生きることを象徴しており、酒は清めることと喜びを表している。だから、墓にお供えするのだ。また、自分の落ち着く場所は、神様から借りた土地だから四隅に酒と水をお供えする。

貧しくても幸せだと、体験している。自分の意に沿わないからと言って、腹を立てないで、お陰を知れば幸せになれる。

次女は、店を借りてパン屋をしていたが、中々良い製品が造れないでいた。五―六年前から、親孝行をさ

せてくれと、ヤマギシ会の一週間の特講へ行ってくれ、
と言っていた。株式会社は、平成七（一九九五）年に倒産
してしまい、次女が心配したからだ。一週間の合宿で
腹を立てないことを学んだ。同郷の人も行っている。
平成一〇（一九九八）年三月も二泊まりで三重県まで行
っていた。現在三〇坪の家を一五万で貸している。そ
の収入で暮らしている。

母村に一度も戻ろうと考えていない。当時母も死亡
しており、一人だった父を残して、誰か子どもが残っ
てくれと言う父を振りきって出て来たから。淋しいけ
れど、帰りたい、帰れない。肝臓癌で入院していたが、
自分で自然食品を食べて治すと自主的に退院した。

平成一三（二〇〇一）年、彼が亡くなったことをケース
25から教えられた。

ケース27

昭和五（一九三〇）年に母村で、五人兄弟の三番目、三
男として誕生する。次男は後に養子にいった。母村尋
常小学校高等科を終戦の年に卒業する。昭和一四（一九

三九）年、小学校三年生九歳の時に父が死亡する。卒業
後母村で農業をする。昭和二四（一九四九）年一九歳の時
に母が死亡する。翌年の昭和二五（一九五〇）年に、兄夫
婦と祖母とで沖繩に移住する。警察の運転手を勤める。

復帰後の昭和二九（一九五四）年一月に大阪へ移動す
る。昭和三二（一九五七）年に、当時大阪消防署署長をし
ていた同郷の有力者の紹介で、株式会社〇〇に、はじ
めアルバイトとして働くが、その年に正社員となる。

その後昭和三三（一九五八）年頃、隣の集落出身の同年
齢女性と結婚する。昭和三四（一九五九）年に長男が誕生
する。

昭和五一（一九七六）年に独立し、実弟と息子と二人の
タイピストで印刷ショップを経営する。〇〇の会社内
にあり、この会社の書類づくりを引き受けている。昭
和五四（一九七九）年に母の三三回忌の為に帰郷する。昭
和五五（一九八〇）年に母村郷友会会長となる。

生まれ育った村へ帰りたい気持ちはあるが、妻は母
村を知らないし、子どももこちらで生まれたので帰れ
ない。村には家も土地も無いけれど。

墓は昭和二七―二九年頃沖縄に在る時に建てた。當時としては、珍しい黒御影石だった。現在、墓は妹の義理の弟に見てもらっている。分骨して大阪に墓を建てるかどうか、迷っている。

郷友会会長をしている時、自分の住む団地の自治会の仕事もしており、どちらの仕事も集中出来なかった。都会生活の中の同郷会として、広い立場で考えたい。戦争など国に何かあった時に奮い立たせるのが愛国心であるならば、愛郷心は都会生活で何かあった時に力を発揮する。二世会については、会員あつての組織であり、参加を促すしかない。母村出身者でなくても、積極的に参加してくれる人もいたので嬉しい。

7 まとめにかえて

――「記述」と「説明」の間で

これらの個人生活史を移住と宗教変容という観点から整理すると以下の点が明確になった。

1. 都市移住後も母村での親族・同窓といったネットワークが維持されていること。

2. そのネットワークを媒介として、就職、居住、配偶者選択がなされていること。

3. このネットワークが強いがゆえに、移住後に創価学会などの新宗教に所属すること。

4. 宗教所属を問わず、母村での祖先祭祀や荒神など民間信仰が残存していること。しかし、ヒヤンガナシが荒神に名称が変わる場合もある。

5. 大本信者は、ほとんど戦前に集落に伝えられ信者になった一族の子孫だけである。

6. 創価学会信者は、すべて移住後に「折伏大行進」時代に入信している。その際、同郷人から導かれる場合が多く見られる。

7. 創価学会入会の理由は、子どもの病気や自身の病気が多い。

8. 一部の創価学会信者では民間信仰や祖先祭祀を払拭している例もある。その場合、学会内での活動も積極的である。

9. カトリック信者は全員移住前に母村で集団洗礼を受けていた。したがって、カトリック信者は移住

先の教会にはあまり参加しないが、帰村すると母村の教会には参加する。

10. 宗教無所属でも戦争による死、シベリヤ抑留、商売の失敗など人生の負の体験をしている。人によつては祖先祭祀を含む民間信仰が支えとなっている。

11. 宗教無所属でも必要に応じて母村の民間信仰（ヒヤンガナシ）に近い都会の信仰（秋葉権現）を選んで祀っている。

12. 宗教無所属でも祖先祭祀については一様に強い信仰を持っている。

13. 母村に帰りたい、という気持ちは一様に持っている。

これらのファインディングスは、農村からの都市移住により母村との社会的紐帯が切れない場合、母村の人間関係を中心としたネットワークが新宗教加入の要因となる仮説を検証している。さらに、新宗教加入者のみならず宗教無所属の変数統制群にも民間信仰が移住後も残存し、これが新宗教受け入れの素地となっていることを示唆している。

これらの仮説検証型の調査研究に、個人を中心とした生活史を用いる場合、サンプリングによる質問紙調査との併用により代表性が保障され、ある程度の人数を継続的に複数回インタビューすることにより信頼性および妥当性が増進することが示された。従来のオーラルヒストリーなどの宗教調査では、アクティブな信者しか対象とされないが、ここでは、アクティブな信者もそうでない信者も同じ土俵で描かれている。より宗教集団の実態に沿ったものとなっている。

しかし、上記の1―13までの項目は、膨大なインタビュー結果の「記述」から、社会的な理論を「説明」・検証するために著者によって抽出され、剥ぎ取られた対象者の生活世界の一部分でしかない。理論検証に利用されるのは、インタビューによる個人史・生活史の一部分であるが、膨大な生活世界の一部を記録し、残す研究意義は三つある。それは、先のライフヒストリー研究グループが主張しているように宗教研究における従来の研究主題が教祖やカリスマ的なリーダーではなく、名もなき一般信者を対象としている点であり、

第二次世界大戦、奄美大島の行政権分離時代、高度経済成長を家族とともに歩んだ「生き様」が記録されていることである。二つ目は、この圧倒的な生き様を前にして、仮説検証以上の社会的事実を研究者に突きつけていることである。この「記述」こそが、今後の新たな研究課題を著者に突きつけていることである。最後は、本編の読者の新たな想像力を喚起することである。これは、今後個人史・生活史研究が盛んになり多くの資料収集が進んだ場合、これらを二次的調査資料として新たな調査研究が起きる可能性を持つからである。その時にこそ、この研究者で集められた個人史・生活史の「記述」は研究者共有の記録として新たな価値を生み出す可能性を持っている。

注

- (1) 口述の生活史、オーラル・ライフヒストリー、個人史、ライフヒストリー、生活史などさまざまな呼び名が用いられているが、ここでは、裁判記録や綴り方教室の作文なども含めて個人の生活を中心に記述されたものの総体を示している。

- (2) 川又・寺田・武井編著『ライフヒストリーの宗教社会学』（ハーベスト社、二〇〇六）

- (3) 前掲書 p.5

- (4) 前掲書 pp.10-13

- (5) 前掲書 p.13

- (6) この論文の生活史は、ロンドン大学の博士論文としてすでに英文として発表されている。そこでは、都市移住と宗教変容に関する仮説が述べられ、検証されている。その論文は「An Anthropological Study of the Religions of Urban Migrants from the Amami Islands with Special Reference to Omoto, Soka Gakkai and Catholicism」(submitted in 2002 October and accepted in November 1st, 2007 by King's College, University of London)である。

- (7) たとえば、石原昌家の研究で、「南島現代社会論への誘い―現代沖縄の郷友会社会」、沖縄国際大学公開講座委員会編『南島文化への誘い』沖縄国際大学公開講座7（那覇出版一九九八）がある。

- (8) 本論文のもととなる資料の一部は、一九八〇、八一年と二カ年にわたり、当時上智大学文学研究科の安齋伸教授を代表とし、トヨタ財団から助成を受けた研究プロジェクトの一部として収集された。そのメンバーは、当時成城大学大学院の小島清志氏に加え、上智大学大学院社会学専攻を中心にして構成されている。当時の上智大学大学院生は、鈴木隆氏、指田隆一氏、浜名篤氏、平田周一氏、吉田（伊藤）あけみ氏である。

- (9) 本編では、個人生活史ではあるが、実際は夫婦単位で多く扱っている。しかし、この場合でも、個人のライフコースが集まってコンボイを形成していると考え、夫婦単位ではなく、個々人を対象としている。
- (10) この経緯に関しては、エルドリッチ、D・ロバート著の『奄美返還と日米関係―戦後アメリカの沖縄占領とアジア戦略』（南方新社二〇〇三年）を参照のこと。
- (11) 当事者たちが「密航」とか「密航組」（密航経験者の世代）という言葉を使用していた。
- (12) 第一回目の調査は一九八〇年に始まった。当時、創価学会は日蓮正宗大石寺の一つの講として宗派の中に位置づけられていた。そのため、ケースの語りの中で、「大石寺登山」や地元寺院との関係が述べられている。
- (13) この占い師が、拝んでいた観音像が「マリアでござる」と夢枕に現れて、カトリックをこの集落に紹介した。後のカトリック信者のケース16にも登場する。
- (14) 創価学会では「花」は供えず「シキミ」を用いるが、インタビューの時に「花」という言葉を使っていた。

（たじま ただあつ／天使大学教授）